

高坂遺跡



報告書

付 表



財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

2008.3.31発行

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第143集

こ う さ か
高 坂 遺 跡

2008

財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団

愛 知 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

序

宝飯郡御津町は、愛知県東部のほぼ中央に位置し、三河湾に面しています。古来より、東海道、平坂街道、三河湾などを通じて人々の往来する場所であり、陸路、海路ともに交通の要衝として、現在までその役割を担ってきました。

高坂遺跡が位置する御津町周辺では、原始の時代より我々の祖先による生活が営まれてまいりました。このことは、周辺地点で確認されている遺跡、過去の発掘調査結果が物語っています。

御津町広石地区では、このたび愛知県建設部道路建設課によって、県道大塚国府線が建設されることとなりました。(財)愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センターでは、愛知県教育委員会を通じて、愛知県建設部からの委託を受け、工事に先立つ事前調査を行いました。その結果、弥生時代・古墳時代・古代を中心とした遺構や遺物を検出することができ、この地の歴史に新たな資料を提供することができました。

調査にあたりまして、愛知県建設部道路建設課、愛知県教育委員会、御津町教育委員会をはじめとする関係諸機関、周辺地域の皆様から多大な御協力をいただきましたことを、深く感謝申し上げる次第です。

最後に、本書がこの地域の歴史理解と、埋蔵文化財研究の一助となれば幸いと存じます。

平成20年3月31日

財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団

理事長 林 良三

例 言

- 1 本書は愛知県宝飯郡御津町広石地内に所在する、高坂遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、愛知県建設部道路建設課による県道大塚国府線建設工事に伴う事前調査として、財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター（当時。現財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター）が、愛知県教育委員会を通じて委託を受けて実施した。調査総面積は3500m²である。
- 3 発掘調査は、平成11年8月から12月に1800m²、平成16年10月から平成17年2月に1700m²を実施した。さらに平成18年度には調査報告書作成のため、整理事業を実施した。
- 4 現地における発掘調査は、平成11年度に愛知県埋蔵文化財センター調査課木下 一、松田 訓、武井繁樹が担当し、平成16年度には宮腰健司、松田 訓が担当し、平成16年度の調査では、株式会社イビソクに調査事業の支援を依頼した。
- 5 調査にあたっては、愛知県建設部道路建設課、愛知県教育委員会文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、御津町教育委員会をはじめとして、多くの関係諸機関の御協力を得た。
- 6 本書の編集は松田 訓が担当し、執筆分担は以下の通りである。
第Ⅰ～Ⅳ章・第Ⅴ章第1～2節第2項・第Ⅵ章＝松田 訓、第Ⅴ章第2節第1項＝宮腰健司
- 7 報告書整理事業については松田 訓が担当し、整理事業には次の方々に参加を得た。
伊藤ますみ・三浦里美（整理補助員）
遺物の実測、トレースは、国際航業株式会社に作業を委託した。
- 8 本書掲載の遺物写真は、金子知久（写真工房 遊）に撮影を依頼した。
- 9 本書に示す座標数値は、国土交通省告示に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠し、「世界測地系」で表記した。また、海拔表記は、東京湾平均海面高度（T.P.）の数値である。
- 10 本書で示す土色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』による。
- 11 遺物の整理番号と登録番号の対象は、表として添付のCDに収録した。
- 12 遺構写真や図面類などの調査記録は、本センターにて保管する。
- 13 出土遺物は、愛知県埋蔵文化財調査センターにて保管する。
- 14 本書の作成にあたり、城ヶ谷和広氏・藤澤良祐氏には出土遺物の時期的解釈において、多くのご指導を得た。さらに本遺跡の調査、報告にあたって、次の諸氏、諸機関にご指導、ご協力をいただいた。記して感謝したい。（五十音順、敬称略）

桑原将人 林 弘之

豊川市教育委員会 御津町教育委員会

目 次

第Ⅰ章 調査の経緯

- 第1節 調査に至る経緯……………(松田) 1
- 第2節 調査の経過……………(松田) 1

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

- 第1節 遺跡の位置……………(松田) 2
- 第2節 歴史的環境……………(松田) 4

第Ⅲ章 調査の概要 ……………(松田) 6

第Ⅳ章 遺 構

- 第1節 基本層序……………(松田) 7
- 第2節 遺構
 - 第1項 概要……………(松田) 9
 - 第2項 遺構……………(松田) 9

第Ⅴ章 遺 物

- 第1節 概要……………(松田) 36
- 第2節 主要遺構別出土遺物
 - 第1項 弥生時代から古墳時代……………(宮腰) 36
 - 第2項 古代以降……………(松田) 38

第Ⅵ章 まとめ ……………(松田) 45

插图目次

第 1 图	遺跡位置図	2	第25图	S B 515平・断面図	28
第 2 图	遺跡周辺地形図	3	第26图	S B 601平・側面図	29
第 3 图	周辺遺跡分布図	5	第27图	S B 602平・側面図	30
第 4 图	調査区配置図	6	第28图	S K 509・514・515平・断面図	31
第 5 图	基本層序概念図	7	第29图	S K 555・557平・断面図	31
第 6 图	調査区断面図	8	第30图	S X 503・510・S K 575・576平・断面図	32
第 7 图	調査区全体図	13	第31图	S X 504・507・511・S K 704平・断面図	33
第 8 图	99区全体図	14	第32图	S D 501周辺遺構 平・断面図	34
第 9 图	S B 01平・断面図	15	第33图	S X 523・524平・断面図	35
第10图	S K 05・06・09平・断面図	15	第34图	S Z 501平面図	35
第11图	S B 02平・断面図	16	第35图	出土遺物実測図（1）	40
第12图	S B 03・S X 14平・断面図	17	第36图	出土遺物実測図（2）	41
第13图	S K 12平・断面図	18	第37图	出土遺物実測図（3）	42
第14图	S K 33平・断面図	18	第38图	出土遺物実測図（4）	43
第15图	S K 37平・断面図	18	第39图	出土遺物実測図（5）	44
第16图	S K 39・41平・断面図	18	第40图	変遷概念図	47
第17图	S K 53・54平・断面図	19			
第18图	04区全体図	20			
第19图	S B 502平・断面図	22			
第20图	S B 504平・断面図	23			
第21图	S B 507平・断面図	24			
第22图	S B 508平・断面図	25			
第23图	S B 509平・断面図	26			
第24图	S B 510・515平・断面図	27			

表目次

表 1	調査行程	1
-----	------	---

第Ⅰ章 調査の経緯

第１節 調査に至る経緯

調査地点は、愛知県宝飯郡御津町広石地内に位置する。愛知県教育委員会が1990年に発行した愛知県遺跡分布地図の東三河地区版によると、大字広石及び隣接の豊沢地区には、石堂野遺跡、広石遺跡、船山古墳、穴観音古墳などが今回の調査地点に近接して記載されている。この地区は現在、山林、耕作地が広がる中に民家が並んでいて、高坂遺跡の所在する地点は、近年まで遺跡としては範囲指定されていなかった。

平成10年、県道大塚・国府線建設にともない、予定地が分布地図記載の遺跡等に近接することから、財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターでは、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて委託を受け、範囲確認調査を行い、弥生、古墳時代を中心とした遺跡の存在を確認した。それを受けて平成11・16年度に発掘調査を実施することとなった。総調査面積は3500㎡である。

第２節 調査の経過

調査は、道路建設予定地を二分割して設定し、平成11年度に99区、平成16年度には04区として実施した。調査行程は第1表に示したように、平成11年8月17日より99区の表土剥ぎを実施し、同年12月24日に99区の埋め戻し作業を終了した。また、平成16年10月12日より04区の表土剥ぎを実施し、平成17年2月11日に04区の埋め戻し作業を終了した。

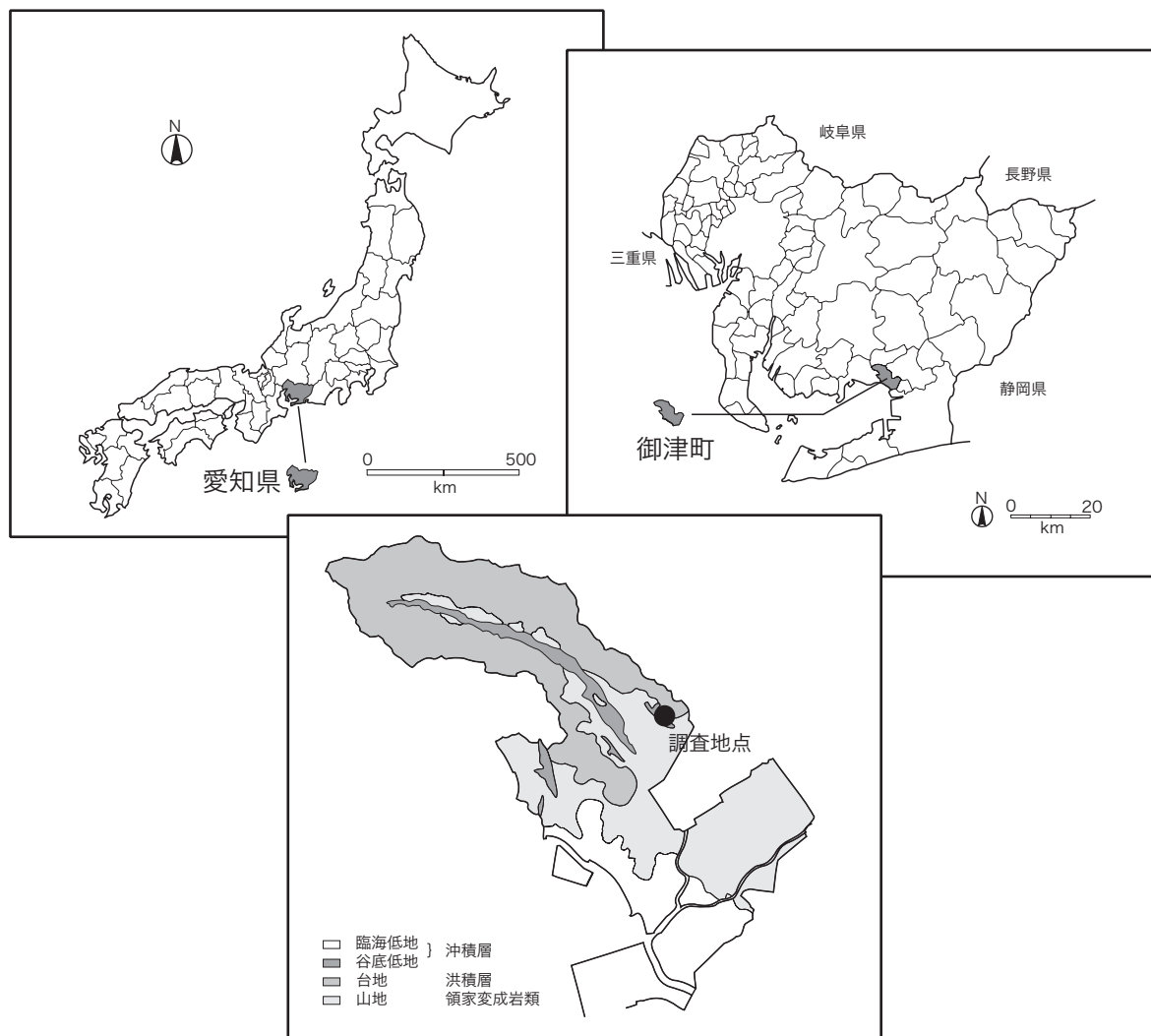
出土遺物の整理作業は、調査中、調査後に洗浄・注記作業を行い、引き続き平成18年4月より、報告書作成までの作業を行った。

表1 調査行程

	H.11						H.16						H.18						
	8月	9月	10月	11月	12月		10月	11月	12月	1月	2月		4月	5月	6月	7月	8月	9月	
99区	■■■■■																		
04区							■■■■■												
航空撮影						●					●								
報告書作成													■■■■■■■						

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置



第1図 遺跡位置図

愛知県は日本列島のほぼ中央、太平洋側に位置し、旧国名では尾張および三河にあたる。高坂遺跡の位置する宝飯郡御津町は、愛知県東部を占める三河地域のほぼ中央やや東側に位置し、三河湾の最も奥まった一角に町域を展開する。町域は音羽町と北で、豊川市、小坂井町、豊橋市とは東で、蒲郡市とは西で接する。この地は、中央構造線の内帯にあたり、宝飯山地とこれに続く台地、河岸段丘、扇状地によって構成される。

高坂遺跡は、北西から南東方向に向かってゆるやかに下る斜面上に所在する。旧態は畑地、果樹園等である。調査地付近の現地標高は、標高約29～44mを測る。



第2図 遺跡周辺地形図（国土地理院1/20万地勢図「豊橋」）

第2節 歴史的環境

高坂遺跡は、弥生時代末から古墳時代初頭および古代の集落跡、中近世の遺物も確認された複合遺跡であるが、出土遺物の主体は古式土師器であった。

『愛知県遺跡分布地図（Ⅲ）東三河地区』の記載によると、埋蔵文化財包蔵地として御津町内に分布する地点は33ヶ所が確認されている。ここでは、調査地周辺に分布する遺跡のうち、高坂遺跡が位置する御津町と豊川市の境界付近を中心として、その歴史的環境を年代ごとに概観する。

高坂遺跡周辺で確認できる遺跡は、古いものでは縄文晩期から弥生時代後期にかけての遺物がみとめられた河原田遺跡があり、調査地点からは南東方向約2.5kmに位置している。

弥生時代のものでは、中期の標識遺跡として著名な長床遺跡が、約2.5km南に位置している。調査地点から東に約150mの位置には、扁平鈕式の流水紋が施された広石銅鐸（県指定文化財）出土地がある。東方1.5kmには、後期の遺物が確認されている国府高校遺跡（豊川市）があり、さらに同時期の坊入遺跡（豊川市）がその約200m東側に位置する。調査地点から浅い谷を隔てた南西隣には、弥生時代末から古墳時代初頭を主体とした石堂野B遺跡がある。

古墳時代では、中期の大入山1号墳（豊川市）が、調査地点から北東方向約600mに位置する。さらに北東方向に約1.6kmの位置には、同時期のものとして、全長96mの前方後円墳である船山第1号墳（豊川市）がある。後期のものとしては、全長37mの前方後円墳である船山古墳が、調査地点から南東方向約600mに位置する。また、調査地点から北西方向に約500mの位置には、穴観音古墳という全長16mの円墳がある。

当地が律令期をむかえると、当時の三河国の中心施設は、この地域に設けられることとなった。調査地点から北東方向に約2kmの白鳥台地上には三河国府の推定地が所在し、この国府域と思われる推定地北側には、古代の遺構・遺物が多く確認された白鳥遺跡がある。この白鳥台地のさらに北東1kmの八幡台地上には、三河国分寺、三河国分尼寺跡がある。また、国分寺跡のすぐ北側には、国分寺に直接関係すると思われる国分寺北遺跡があり、白鳥・八幡台地上が当時の三河国での中心地点として機能していたことがうかがえる。三河国府が位置する白鳥台地と三河国分寺・国分尼寺が位置する八幡台地は、それぞれが舌状にのびていて、この間は谷地形となっている。この両台地を結んでいたと推定される道路跡が、上ノ蔵遺跡にて確認されている。この地域の南側一帯では、条里の遺構としては著名な、為当条里が良好に残っている。

中世となって律令制の支配体制がくずれると、この地域は「御津庄」の名がいくつかで見られるように、荘園化されたようである。さらに下って戦国期にいたると、駿河国の今川氏が西への勢力拡大を図り、尾張・三河の国衆や領主層がなんとか阻もうと抵抗をこころみたため、抗争が繰り返される地帯となってゆく。

近世に入り徳川幕府による安定支配が続くと、幕府の街道整備により主要道の宿場町として、また代官の三河五か湊選定による港町として、交通の要衝としての発展がみられ、現勢の基礎が築かれてゆく。



- | | | | | |
|-------------|------------|------------|-------------|------------|
| 1. 高坂遺跡 | 2. 石堂野遺跡 | 3. 石堂野B遺跡 | 4. 穴観音古墳 | 5. 広石銅鐸出土地 |
| 6. 船山古墳 | 7. 大入山第1号墳 | 8. 山ノ入遺跡 | 9. 国府高等学校遺跡 | 10. 坊入遺跡 |
| 11. 三河国府推定地 | 12. 船山第1号墳 | 13. 三河国分寺跡 | 14. 三河国分尼寺跡 | 15. 長床遺跡 |
| 16. 河原田遺跡 | 17. 上ノ蔵遺跡 | 18. 白鳥遺跡 | 19. 国分寺北遺跡 | |

第3図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

第Ⅲ章 調査の概要

調査区は、県道大塚国府線の建設工事予定地に設定した。したがって調査地点は、道路予定地に合わせられたために細長く、これを各年度で分割設定したため、南西側から北東に向かって、99区、04区として順に調査を進めた。

調査地点は、南西方向に向かって下るゆるやかな斜面で、この下方には小河川の流れる谷底低地があり、周囲を含めて旧態は畑地、果樹園である。このため、遺構検出面や深度のある遺構基底部からの湧水はみとめられなかった。したがって、調査地点の排水除去は雨水のみで、調査区端でのトレンチを利用した。

調査区内の表土除去は、機械（バックホウ）掘削によって行った。この調査地に排土処理のためにベルトコンベヤーを配し、隣接地を排土用地に充てた。

各調査区では、遺物検出作業に先立ち、明治時代初頭遺構の斜面改良、耕作痕が確認されたため、掘削痕の埋土除去に作業を割かれた。この後、遺構検出作業に入り、遺構掘削、写真撮影、測量を行い、最終的に基盤層の土層サンプルを採取して、調査を終了した。



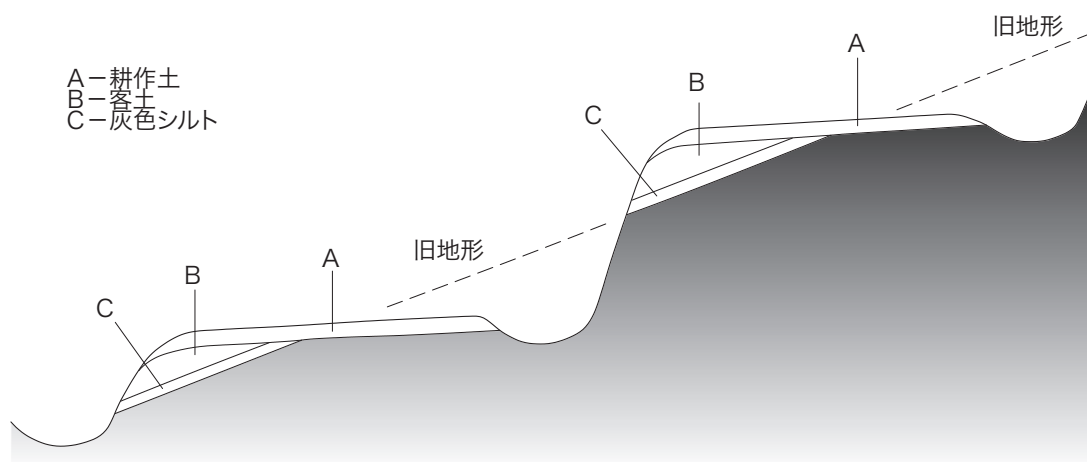
第4図 調査区配置図

第Ⅳ章 遺 構

第 1 節 基本層序

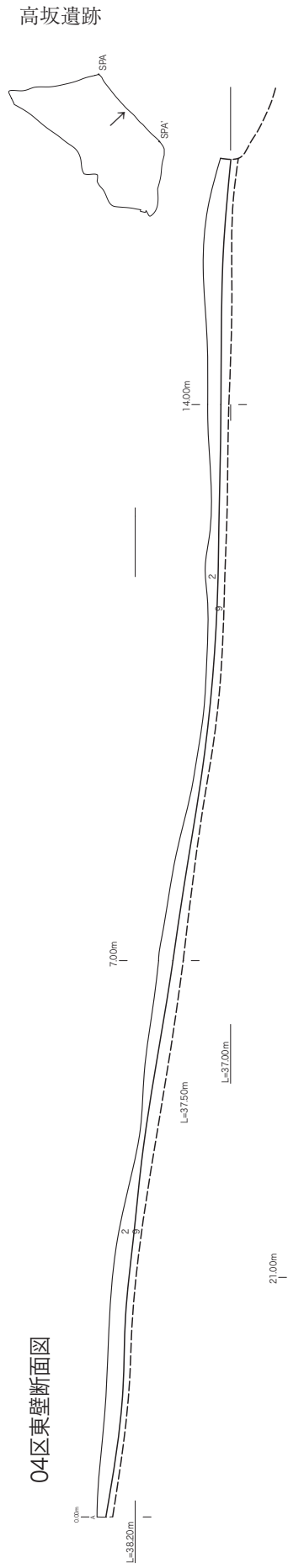
高坂遺跡における基本層序を概観すると、第5図のような状況がみてとれる。地表面は標高29～44 mの斜面で、表土は耕作土または客土であった。調査地の旧態は畑地、果樹園で、ゆるやかな斜面は大部分が平地確保のため、段状に造成されていた。このため、平地として造成された段の直下には、排水用の溝が掘削されていて、この埋土と段の直上に盛り上げられた客土を除去し、遺構検出をおこなった。したがって調査区内の大部分では、遺構検出時には、台地の基盤層である赤褐色または黄褐色粘質土が現れた。調査区内の一部では、基盤層の直上に灰褐色シルトが堆積していたが、面を成するような広がりにはならなかった。

調査区内でみとめられた造成は、近代以降のかく乱として扱ったが、このために層序の旧態が判断できる部分が少なかった。さらに基盤層自体に起伏があったため、高まりを削り、窪地を埋めることで平地確保が繰り返されたものと思われる。したがって、安定した堆積面の広がり、土層によって判断しながら追い求めるのは困難であった。

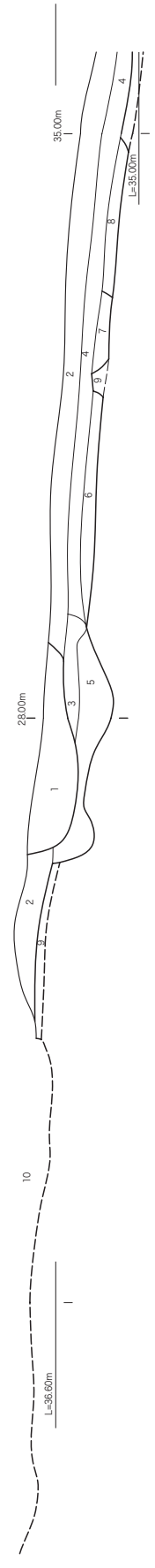


第5図 基本層序概念図

04区東壁断面図

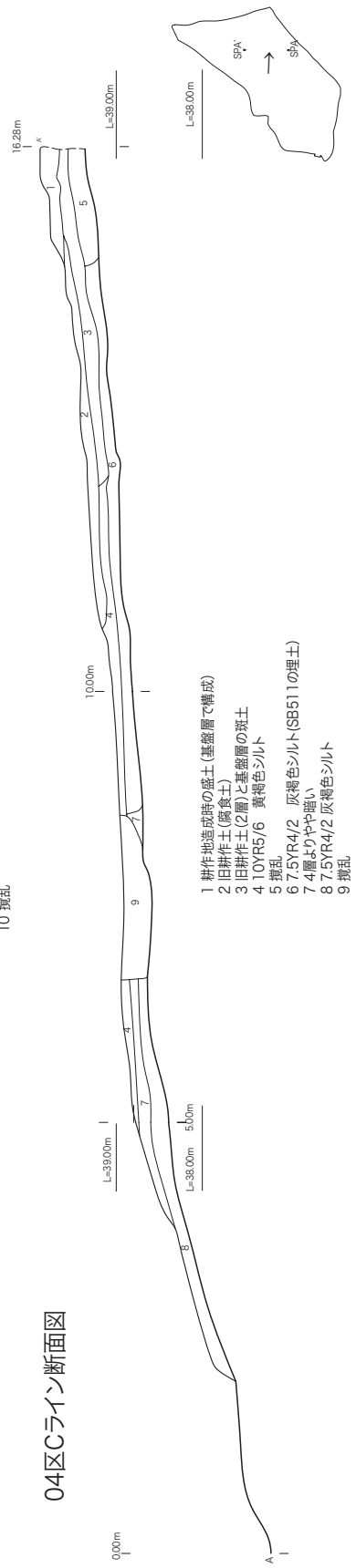


第6図 調査区断面図 (1/80)



- 1 7.5YR4/2 灰褐色シルト(SX516の埋土)
- 2 表土
- 3 10YR6/8明黄褐色シルトと7.5YR4/2 灰褐色シルトの埋土(SK750の埋土)
- 4 7.5YR4/2 灰褐色シルト
- 5 7.5YR4/2 灰褐色シルトと10YR6/8明黄褐色シルトの埋土(SK750の埋土)
- 6 10YR6/8明黄褐色シルト(SB509の埋土)
- 7 10YR5/6黄褐色シルト(SX523の埋土)
- 8 7.5YR4/2 灰褐色シルト(SX524の埋土)
- 9 基盤層
- 10 攪乱

04区Cライン断面図



- 1 耕作地造成時の盛土(基盤層で構成)
- 2 旧耕作土(腐食土)
- 3 旧耕作土(2層)と基盤層の埋土
- 4 10YR5/6 黄褐色シルト
- 5 攪乱
- 6 7.5YR4/2 灰褐色シルト(SB511の埋土)
- 7 4層よりやや深い
- 8 7.5YR4/2 灰褐色シルト
- 9 攪乱

第2節 遺構

第1項 概要

今回の調査地点で検出した遺構は、主として竪穴住居、土坑、円形小穴、溝、土墳墓、方形周溝墓、その他の掘り込みなどであった。これらの遺構は、一定量が数的には確認できているが、この中で埋土に遺物をともなうものは少なかった。また、遺物包含層と呼べる層は、調査区の中でわずかであり、遺物の密度もかなり薄かった。したがって、遺構の時期が判断できたものは、わずかであった。この出土遺物の中で、今回の調査地点全体で確認できた時期を概観すると、弥生時代末～古墳時代初頭、古墳時代後期以降に大別できそうである。

遺構の時代別比較では、全体の中で古墳時代後期が比較的多く、弥生時代末～古墳時代初頭、平安時代以降の時期が判明した遺構も見られるが、数は少なかった。こうした状況を、西側に位置する石堂野遺跡（昭和60年度調査）、石堂野B遺跡（平成12年度調査）と比較すると、時代別では弥生時代末～古墳時代初頭がもっとも古い時期であることは同じであった。しかし主体となる遺構の時期は、石堂野遺跡が古代、石堂野B遺跡が弥生時代末～古墳時代初頭と、違いが見られた。

遺構の内容としては、検出遺構の主体をなすものが竪穴住居跡であり、04調査区ではそれらに切り合い関係もいくつかみとめられた。しかしその密度においては、石堂野遺跡の方が調査区全体に確認されているのに対して、石堂野B遺跡では限定的であり、当調査地点においても04調査区側に偏る傾向がみられた。

第2項 遺構

今回の99、04調査区において、弥生時代末～古墳時代初頭の遺物をともなう遺構は、竪穴住居、方形周溝墓、土坑、その他の遺構等である。全体的にはわずかであるため、一定規模の集落が存在したことを想定できるまでの資料とはならなかった。これらの時期の遺構は、99調査区北端・04調査区南端の近接した位置で検出された。

古墳時代後期以降の遺構は、竪穴住居、土坑、溝状遺構などである。全体的に見ると、古墳時代後期～古代の遺構が、04区側で多く検出された。

・竪穴住居

S B 01 99区東側に位置する。平面形態は隅丸方形を呈するものと思われ、検出高は32.3mを測り、下端における長径は4.6m、残存の深さは0.15mを測り、上部は削平されたものと思われる。埋土はにぶい黄褐色シルトを基調とし、平面形における主軸の方向は、N-1°-Wを示す。検出された残存部では明瞭な支柱穴の構成、内部施設の位置は確認できなかった。時期を判別できる遺物は、検出されなかった。平面の形状、掘削方向などから、古代の竪穴住居である可能性も考えられる。

S B 02 99区中央やや北側に位置する。平面形態は不整形方形を呈するものと思われ、検出高は33.2mを測り、下端における長径は5.6m、残存の深さは0.4mを測り、上部は削平されたものと思われる。埋

高坂遺跡

土はにぶい黄褐色シルトを基調とし、重複関係ではS K45および46を切り、S K47に切られている。平面形における主軸の方向は、 $N-43^{\circ}-W$ を示す。検出された残存部では壁溝がめぐっているのが確認できたが、明瞭な支柱穴の構成、炉の位置は確認できなかった。遺物は、欠山期のものと思われる壺、甕、高坏、手焙り形土器他がまとまって出土している。

S B03 99区北側に位置する。平面形態は不整形を呈するものと思われ、検出高は32.3mを測り、下端における長径は4.6m、残存の深さは0.15mを測り、上部は削平されたものと思われる。埋土はにぶい黄褐色シルトを基調とし、平面形における長軸の方向は、 $W-10^{\circ}-N$ を示す。検出された残存部では明瞭な支柱穴の構成、内部施設の位置は確認できなかった。遺物は、古代の土器鍋把手以外に、時期を判別できるものが検出されなかった。

S B501 04区ほぼ中央に位置する。平面形態は不整形を呈するものと思われ、検出高は37.7mを測り、下端における東西長径は4.9m、残存の深さは0.25mを測り、上部は削平されたものと思われる。埋土は、灰褐色シルトを基調とする。平面形における主軸の方向は、 $W-14^{\circ}-N$ を示す。検出された残存部では、北西側に壁溝がめぐっているのが確認できたが、明瞭な支柱穴の構成、内部施設の位置は確認できなかった。遺物は、時期を判別できるものが検出されなかった。

S B502 04区中央やや北側に位置する。平面形態は不整形を呈し、検出高は39.1mを測り、下端における東西長径は4.8m、残存の深さは中央部で0.4mを測る。埋土は、灰褐色シルトを基調とする。平面形における主軸の方向は、 $W-4^{\circ}-N$ を示す。西側に壁溝がめぐっているのが確認できたが、明瞭な支柱穴の構成は確認できなかった。北壁中央やや東には、カマドと思われる焼土と掘り込みが確認された。遺物は、7世紀後半の土器、須恵器片が検出された。

S B504 04区中央やや北側に位置する。平面形態は不整形を呈し、検出高は37.7mを測り、下端における東西長径は5.9m、残存の深さは中央部で0.4mを測る。埋土は、黄褐色シルトを基調とする。重複関係ではS X507および509を切り、S X503および504などに切られている。平面形における主軸の方向は、 $W-8^{\circ}-N$ を示す。南辺を除いて壁溝がめぐっているのが確認できたが、明瞭な支柱穴の構成は確認できなかった。遺物は、古代の土器、須恵器片が検出された。

S B507 04区中央やや北側に位置する。平面形態は不整形を呈し、検出高は35.8mを測り、下端における南北長径は3.9m、東西径3.5m、残存の深さは中央部で0.25mを測る。埋土は黄褐色シルトを基調とする。重複関係ではS X526を切り、S K674に切られている。平面形における主軸の方向は、 $N-7^{\circ}-E$ を示す。四辺に壁溝がめぐっているのが確認できたが、明瞭な支柱穴の構成は確認できなかった。北壁中央やや東には、カマドと思われる焼土と掘り込みが確認された。遺物は、古代の土器、須恵器片が検出された。

S B508 04区中央やや南側に位置する。平面形態は不整形を呈し、検出高は36.5mを測り、下端における東西長径は4.1m、南北径3.5m、残存の深さは中央部で0.3mを測る。埋土は、灰褐色シルトを基調とする。重複関係では、S K634・635などに切られている。平面形における主軸の方向は、 $W-3^{\circ}-N$ を示す。壁溝、明瞭な支柱穴の構成は、確認できなかった。遺物は、古代の須恵器片が検出された。

S B509 04区中央南側に位置する。平面形態は不整形を呈するものと思われ、検出高は36.1mを測り、下端における南北径は4.4m、残存の深さは中央部で0.3mを測る。埋土は、黄褐色シルトを基調と

する。重複関係では、掘立柱建物の柱穴などに切られている。平面形における主軸の方向は、N-7°-Eを示す。北西隅に壁溝がめぐっているのが確認できたが、明瞭な主柱穴の構成は確認できなかった。遺物は、時期を判別できるものが検出されなかった。

S B 510 04区中央やや東側に位置する。平面形態は不整形を呈し、検出高は39.5mを測り、下端における南北長径は4.2m、東西径3.6m、残存の深さは中央部で0.2mを測る。埋土は、黄褐色シルトを基調とする。重複関係ではS B 512および515を切り、S K 512および700などに切られている。平面形における主軸の方向は、N-4°-Wを示す。北壁に溝がめぐっているのが確認できたが、明瞭な主柱穴の構成は確認できなかった。遺物は、時期を判別できるものが検出されなかった。

S B 511 04区中央やや東側に位置する。平面形態は不整形を呈するものと思われ、検出高は38.8mを測り、下端における南北長径は5.5m、残存の深さは中央部で0.4mを測る。埋土は、灰褐色シルトを基調とする。平面形における主軸の方向は、N-1°-Eを示す。東側に壁溝がめぐっているのが確認できたが、明瞭な主柱穴の構成は確認できなかった。北壁中央やや東には、カマドと思われる焼土と掘り込みが確認された。遺物は、古代の須恵器片が検出された。

・掘立柱建物

S B 601 04区中央やや南側に位置する。平面形態が楕円・不整円・不整形を呈する掘り込みが、「口」の字状に並ぶ。検出高は、35.6～36.2mを測る。直径は0.7～1.2mで、検出面からの深さは、0.3～0.5mを測る。埋土は灰褐色・黄褐色シルトを基調とするものが多く、土層断面の状況では柱痕等はみとめられなかった。列の配置から想定した東西主軸の方向は、W-5°-Nを示す。規模は、梁間が4.0m、桁行7.1mで、柱穴と思われる掘り込みの間隔は、1.6～2.3mを測る。推定面積は28.4m²で、側柱建物と思われる。土器、須恵器片がわずかに含まれているもの以外は、各掘り込みに遺物は含まれていなかった。したがって、掘削時期を確定するまでには至らなかった。重複関係では、S B 509を切っている。

S B 602 04区北側に位置する。平面形態が不整円形を呈する小規模な掘り込みが、等間隔に並ぶ。検出高は、40.5～40.8mを測る。直径は0.2～0.25mで、検出面からの深さは、0.15～0.4mを測る。埋土は黄褐色・灰褐色シルトを基調とするものが多く、土層断面の状況では柱痕等はみとめられなかった。列の配置から想定した東西主軸の方向は、N-4°-Eを示す。規模は、南北が2.4mで、柱穴と思われる掘り込みの間隔は、0.9～1.2mを測る。各掘り込みに、遺物は含まれていなかった。したがって、掘削時期を確定するまでには至らなかった。建物の構造は、小穴の配置状況から間仕切りをもつ側柱建物か、総柱建物の可能性も考えられるが、いずれにしても小規模なものだと思われる。

・土坑

S K 53 99区中央やや西側に位置する。平面形態は不整形を呈し、検出高は30.5mを測り、長径2.5m、短径1.7m、深さ0.2mを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトを基調とする。遺物は、8世紀後半の土器甕、鍋、須恵器碗、小碗が出土している。

S K 54 99区中央やや西側に位置する。平面形態は不整形を呈し、検出高は30.5mを測り、長径1.4m、短径1.2m、深さ0.2mを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトを基調とする。遺物は、古代の土器甕が

高坂遺跡

出土している。

S K 509 04区東側に位置する。平面形態は不整円形を呈し、検出高は39.4mを測り、長径1.3m、短径1.1m、深さ0.6mを測る。埋土は黄褐色シルトを基調とする。遺物は、土器皿が出土している。

S K 555 04区中央やや北側に位置する。平面形態は不整長方形を呈し、検出高は38.0mを測り、長径0.7m、短径0.4m、深さ0.25mを測る。埋土は灰褐色シルトを基調とする。遺物は、欠山期のものと思われる高坏の脚部片が出土している。

・ 方形周溝墓

S Z 501 04区中央やや南側に位置する。主体部と思われる掘り込みは見つかっておらず、後世の溝状掘り込み **S D 501** や土坑などによって、切られた状態で検出された。溝の断面形態は船底形を呈し、少なくとも北東隅と南西隅には、陸橋部を有するものと思われる。西側の後世の溝 **S D 501** の基底部からは、欠山期のものと思われる壺形土器がほぼ完形で出土している。検出高は35.2～36.7mを測り、周溝下端の内側間での距離は、東西9.6m、南北8.0mを測り、検出状態での深さは、約0.4mを測る。

・ 不明遺構

S X 503 04区中央やや北側に位置する。平面形態は楕円形、南北方向に伸び、断面形態は船底形を呈し、検出高は37.8mを測る。幅は0.9m、検出長2.4m、深さ0.35mを測る。重複関係では、**S B 504** を切っている。埋土は灰褐色シルトを基調とし、遺物は古代の須恵器片が出土している。

S X 504 04区中央やや北側に位置する。平面形態は楕円形、南北方向に伸び、断面形態は船底形を呈し、検出高は37.9mを測る。幅は0.8m、検出長2.1m、深さ0.25mを測る。重複関係では、**S B 504** を切っている。埋土は灰褐色シルトを基調とし、遺物は古代の灰釉陶器片が出土している。

S X 526 04区南端西側に位置する。平面形態は隅丸方形を呈する可能性があり、北辺には壁溝状のものがみられる。残存部分の平面形態が整っており、柱穴状の小穴もみられることから、竪穴住居跡の残存部の可能性も考えられる。

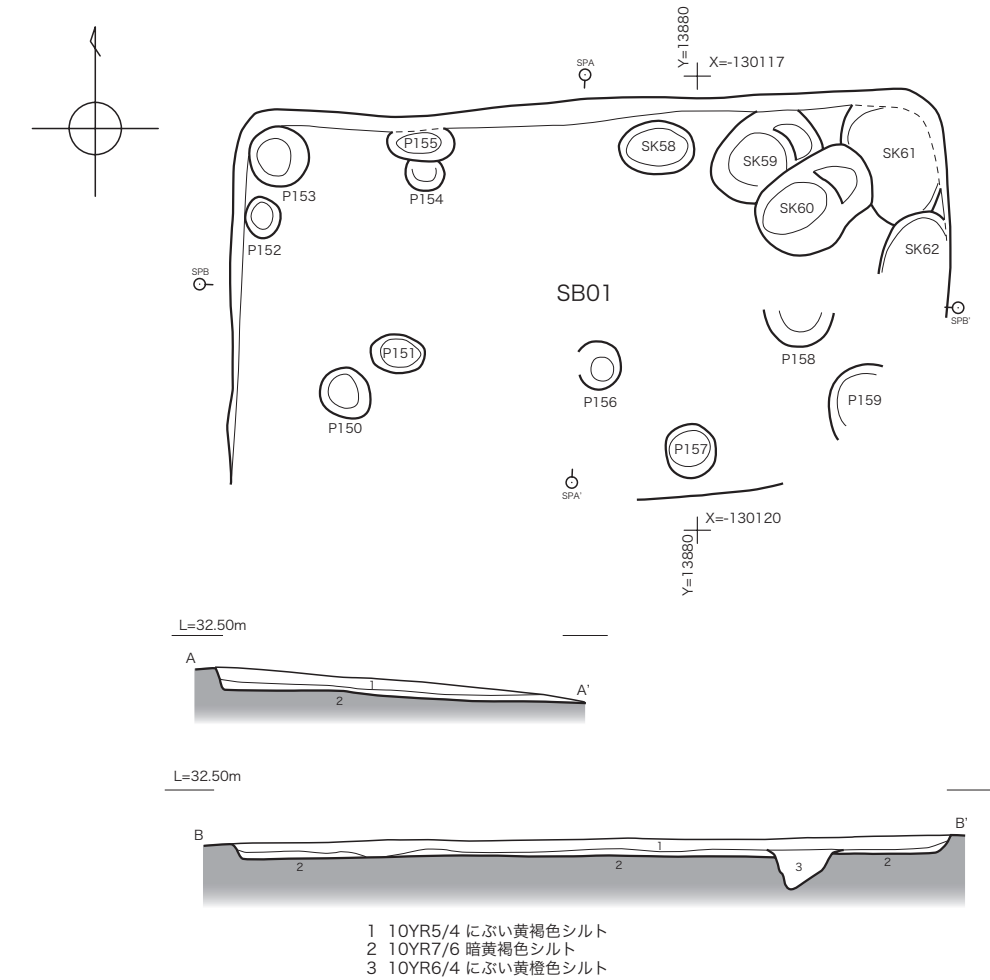
・ 溝状遺構

S D 501 04区中央やや南側に位置する。南北方向に伸び、断面形態は船底形を呈し、検出高は35.5～36.7mを測る。幅は1.2m、検出長9.3m、深さ0.4mを測る。重複関係では、**S Z 501** の西側溝とほぼ重なる位置でこれを切り、さらに、**S B 601** の西側柱穴を切っている。平面形における主軸の方向は、N - 8° - Eを示す。埋土は灰褐色シルトを基調とし、遺物は戦国時代の内耳鍋が出土している。

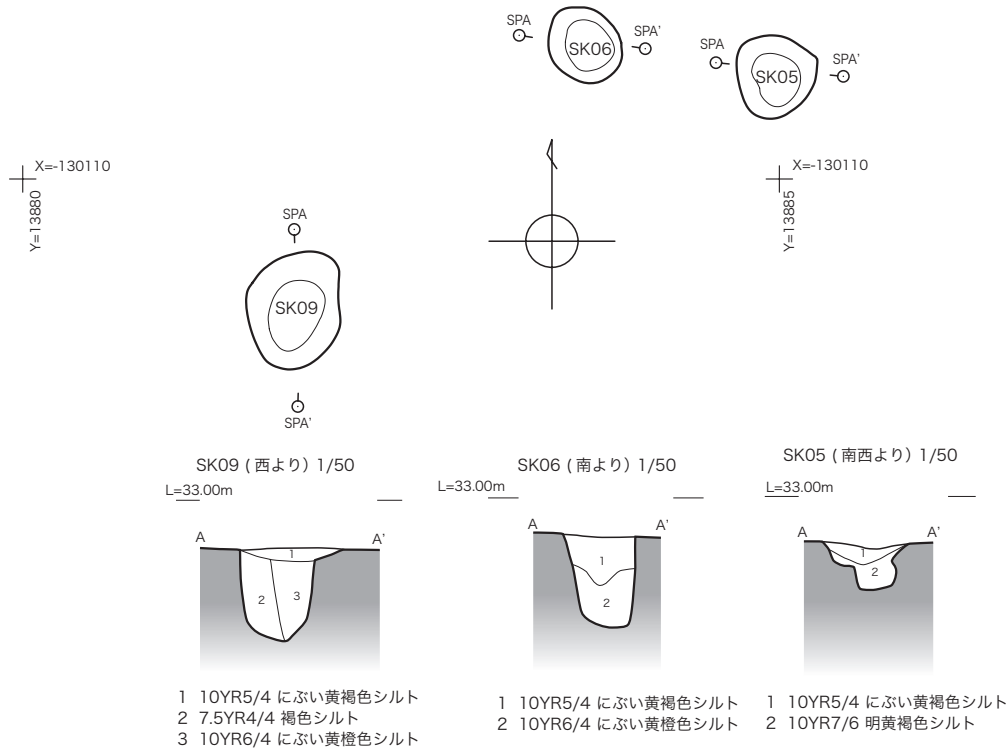


第7図 調査区全体図 (1/600)



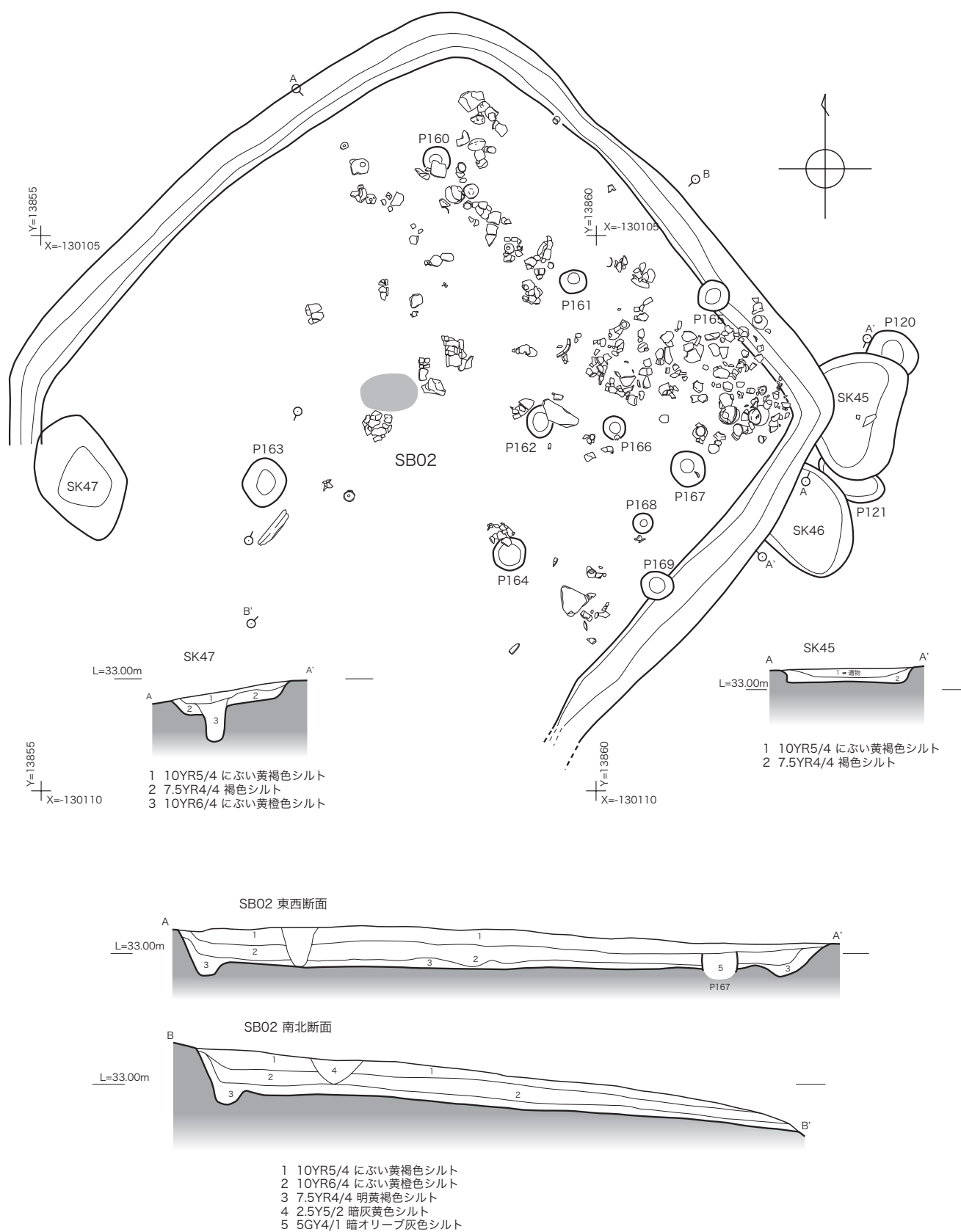


第9図 SB01平・断面図 (1/50)

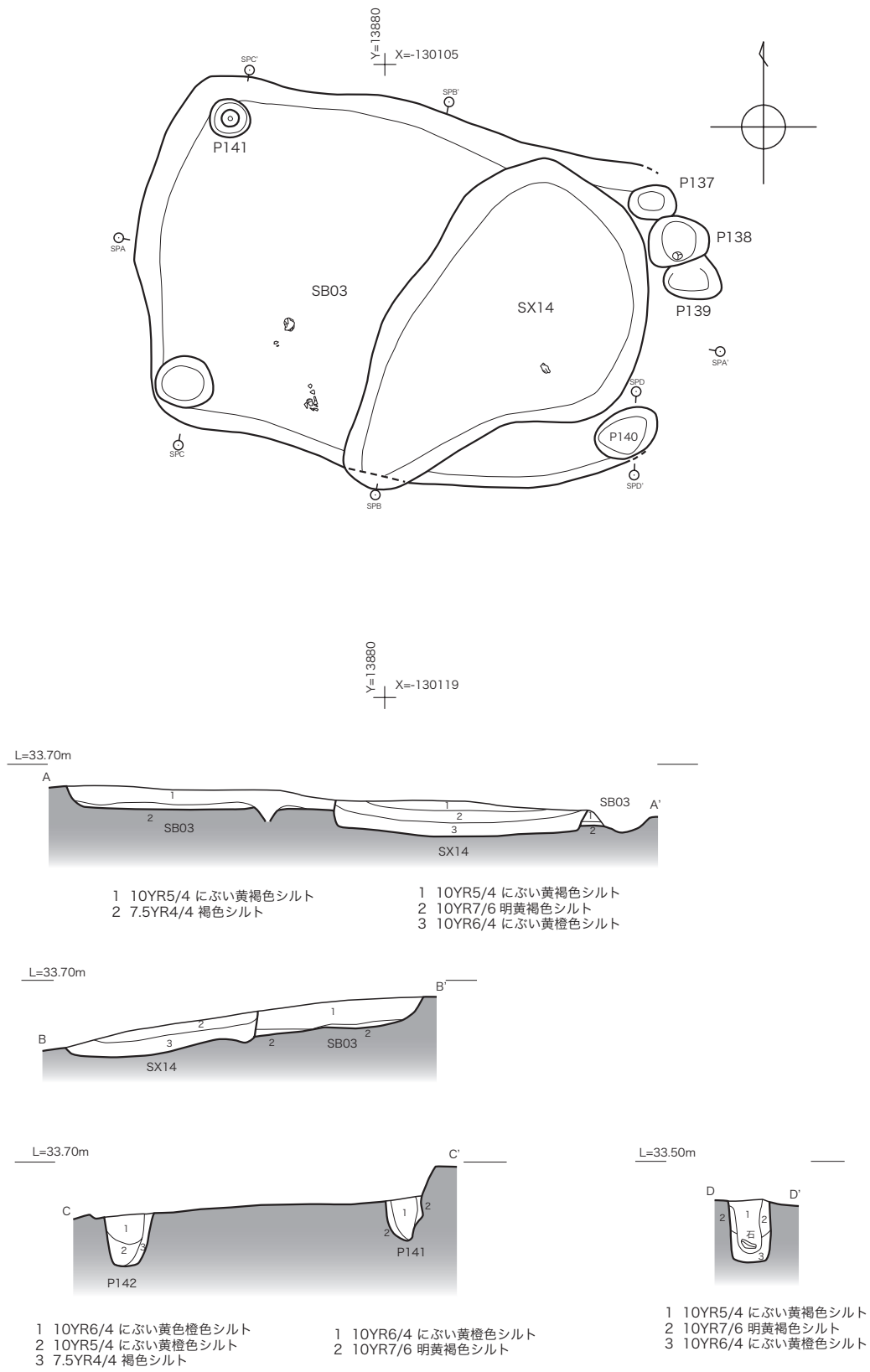


第10図 SK05・06・09平・断面図 (1/50)

高坂遺跡

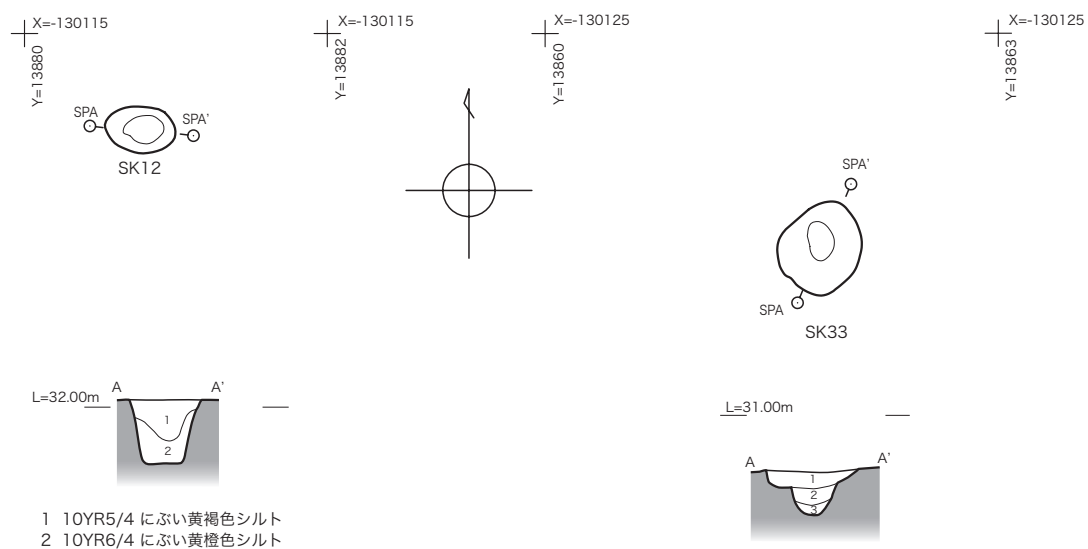


第11図 SB02・SK45・47平・断面図 (1/50)



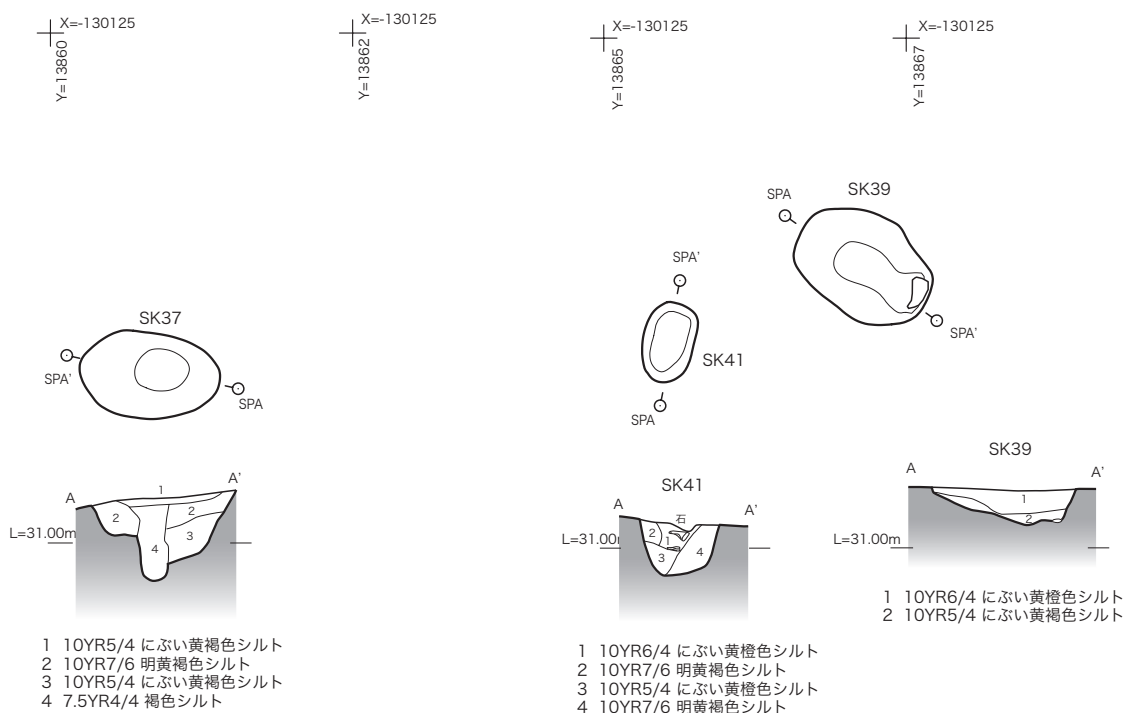
第12図 S B03・S X14平・断面図 (1/50)

高坂遺跡



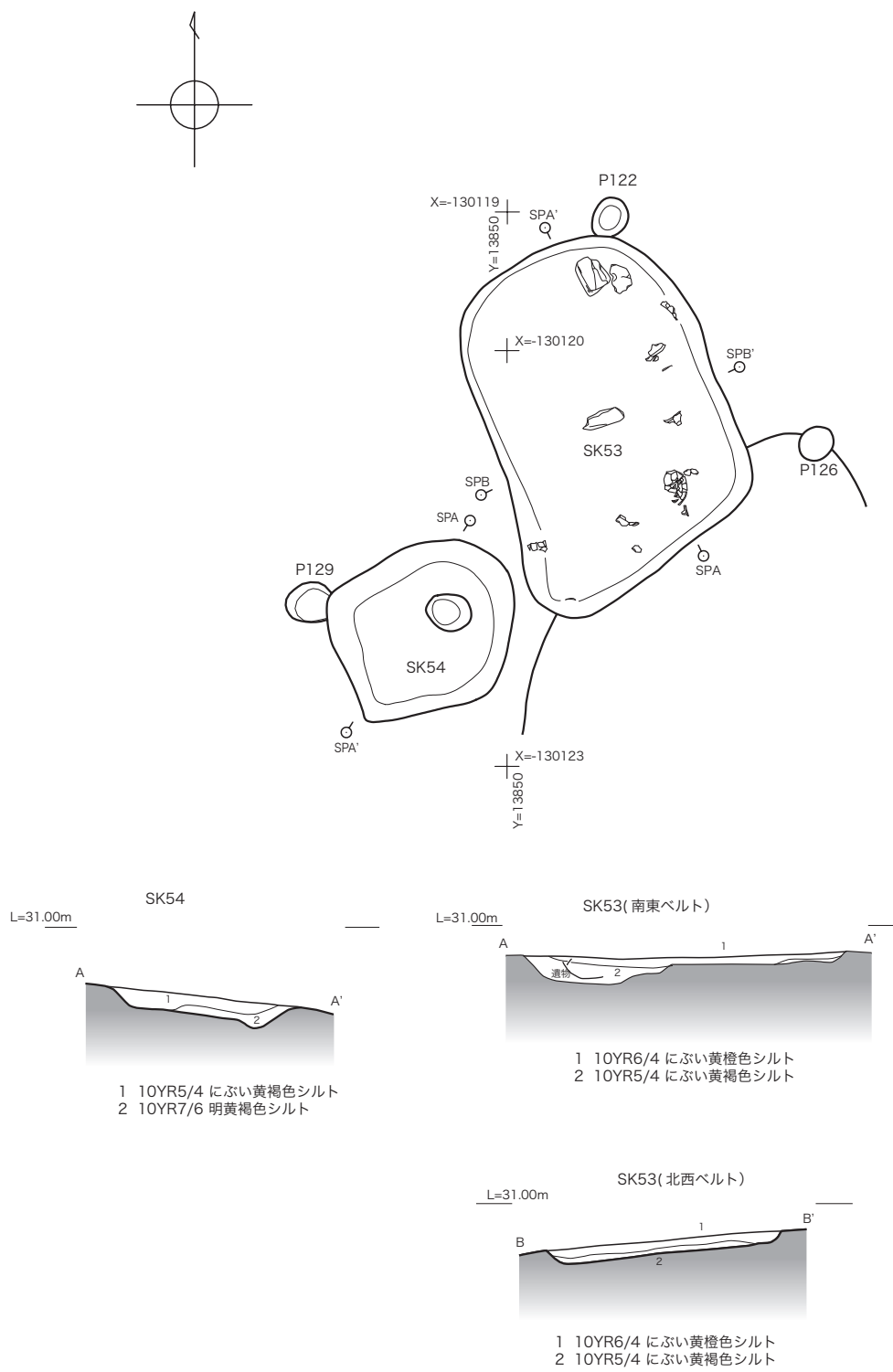
第13図 SK12平・断面図 (1/50)

第14図 SK33平・断面図 (1/50)



第15図 SK37平・断面図 (1/50)

第16図 SK39・SK41平・断面図 (1/50)



第17図 S K53・54平・断面図 (1/50)

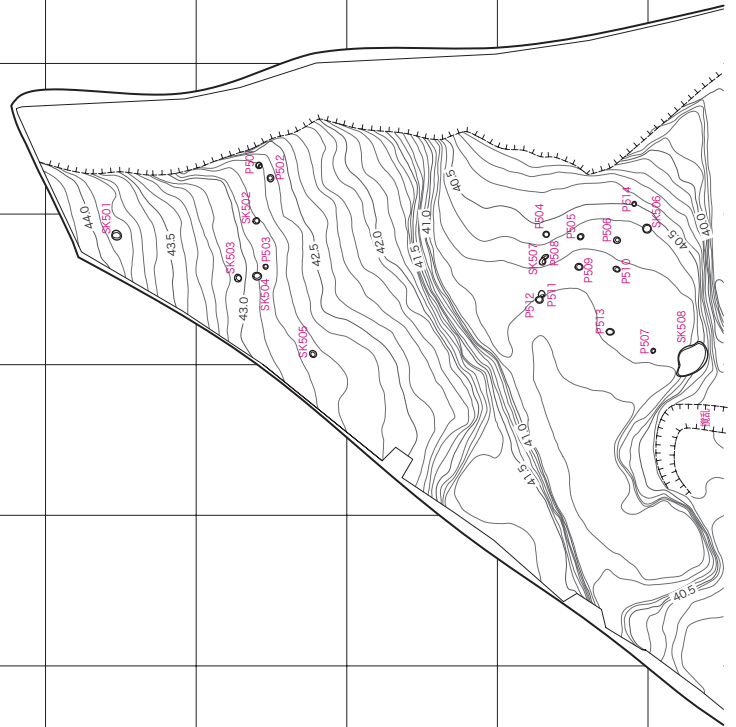
Y 13.870 Y 13.880 Y 13.890 Y 13.900 Y 13.910 Y 13.920

X -130.020

X -130.030

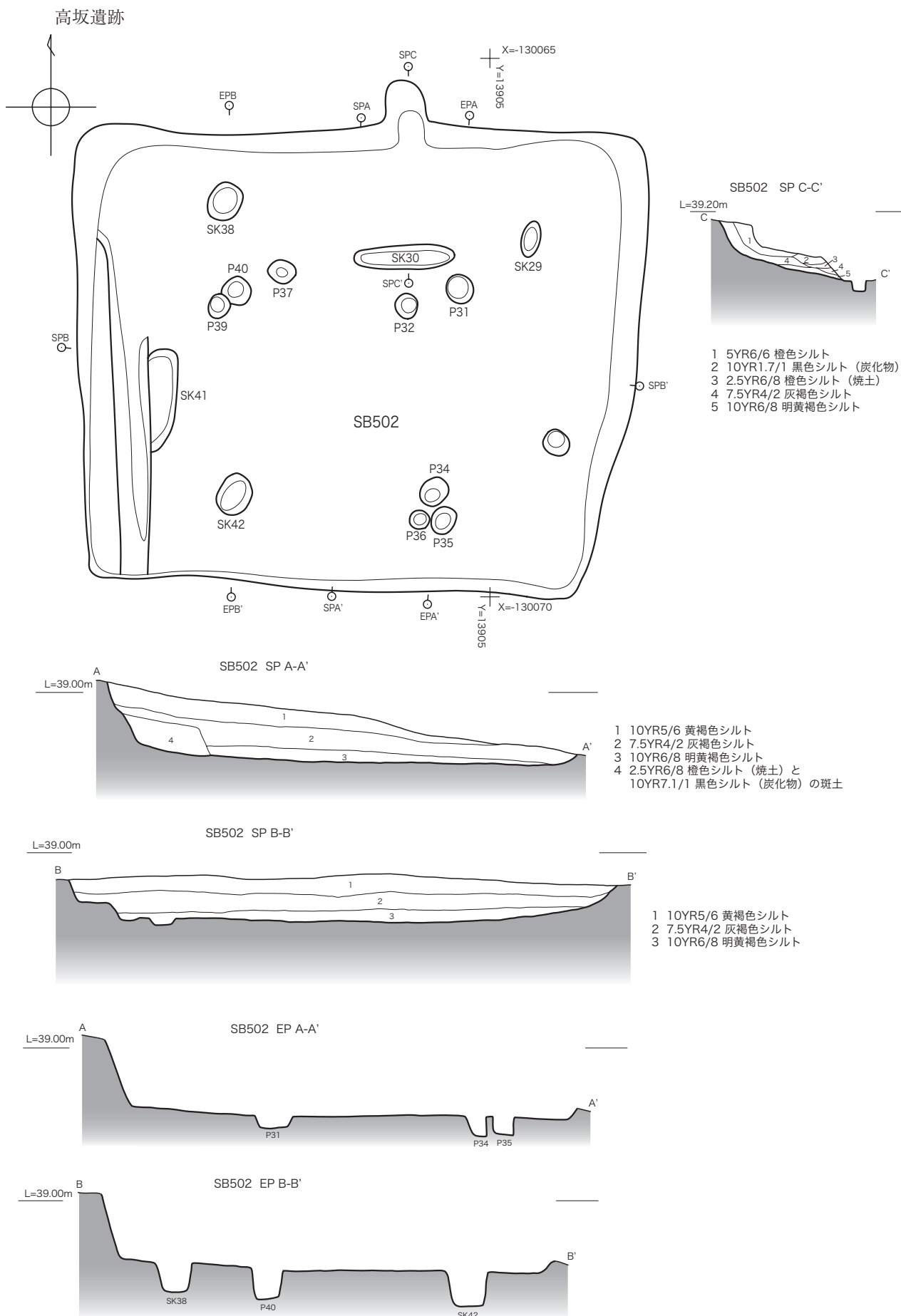
X -130.040

X -130.050

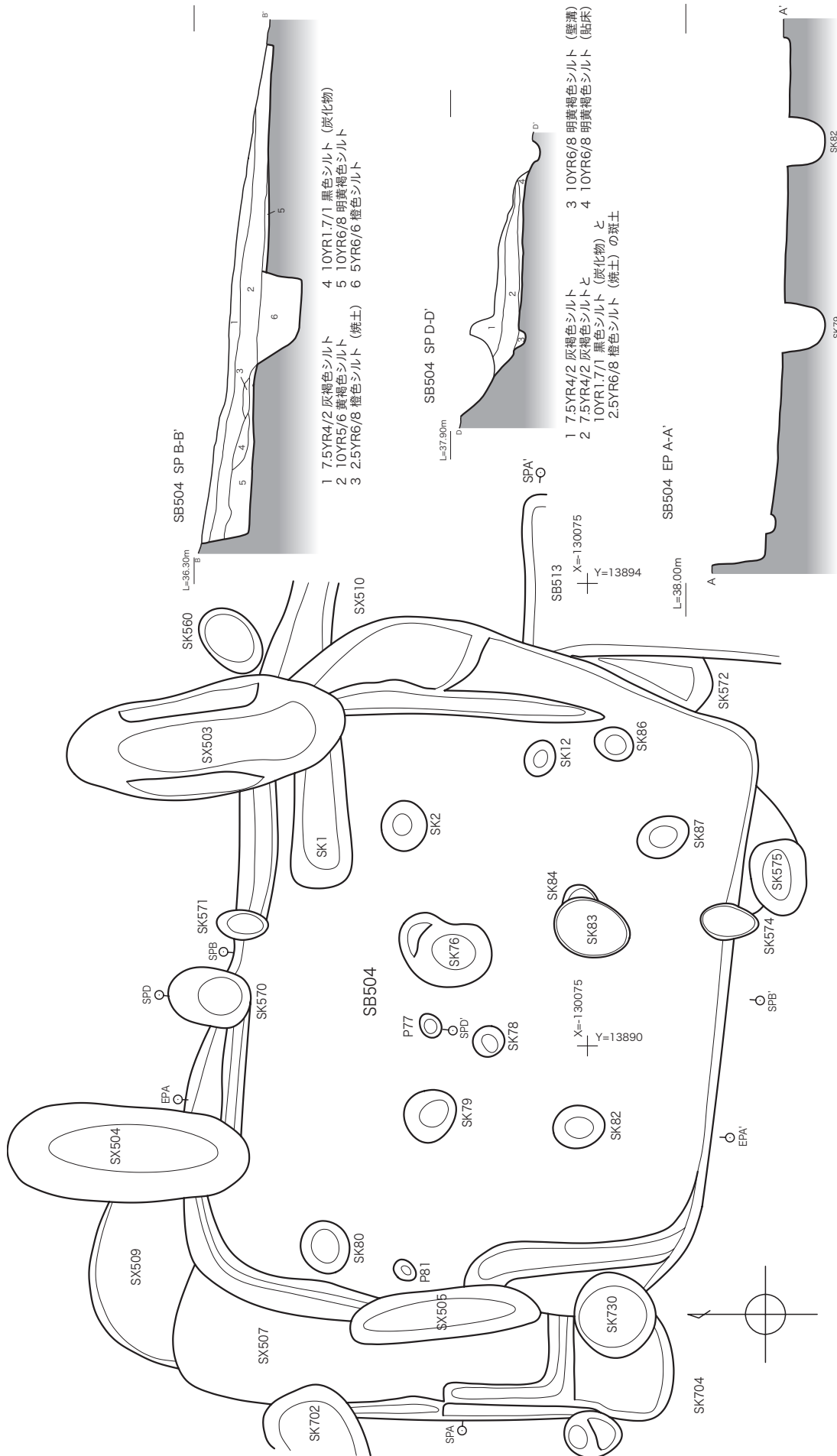




遺構



第19図 SB502平・断面図 (1/50)

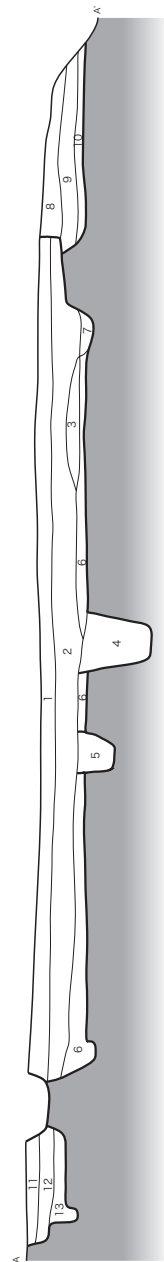


第20図 S B 504平・断面図 (1/50)

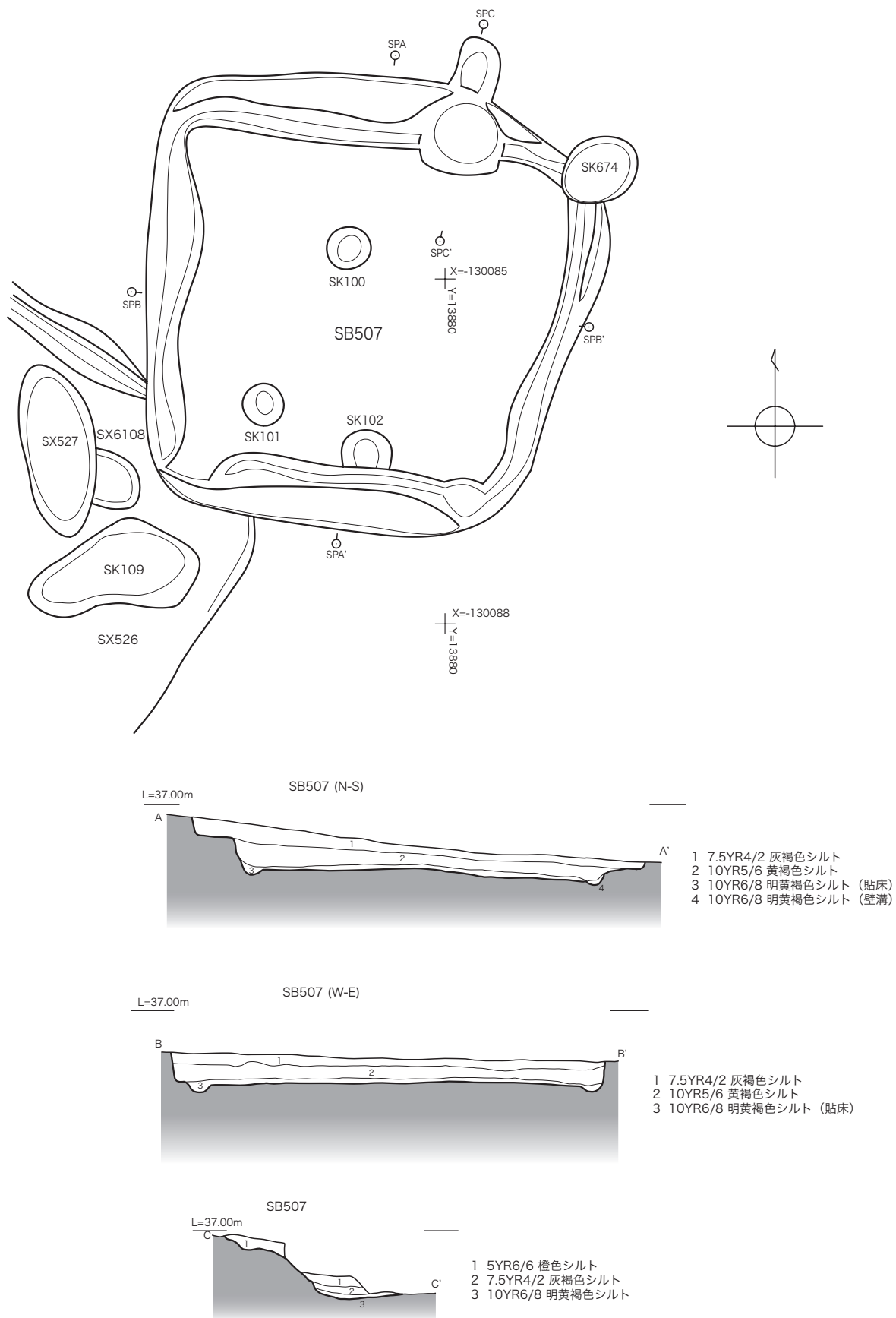
遺構

SB504 SP A-A'

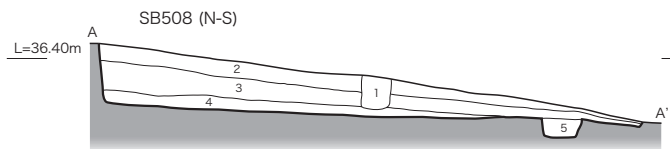
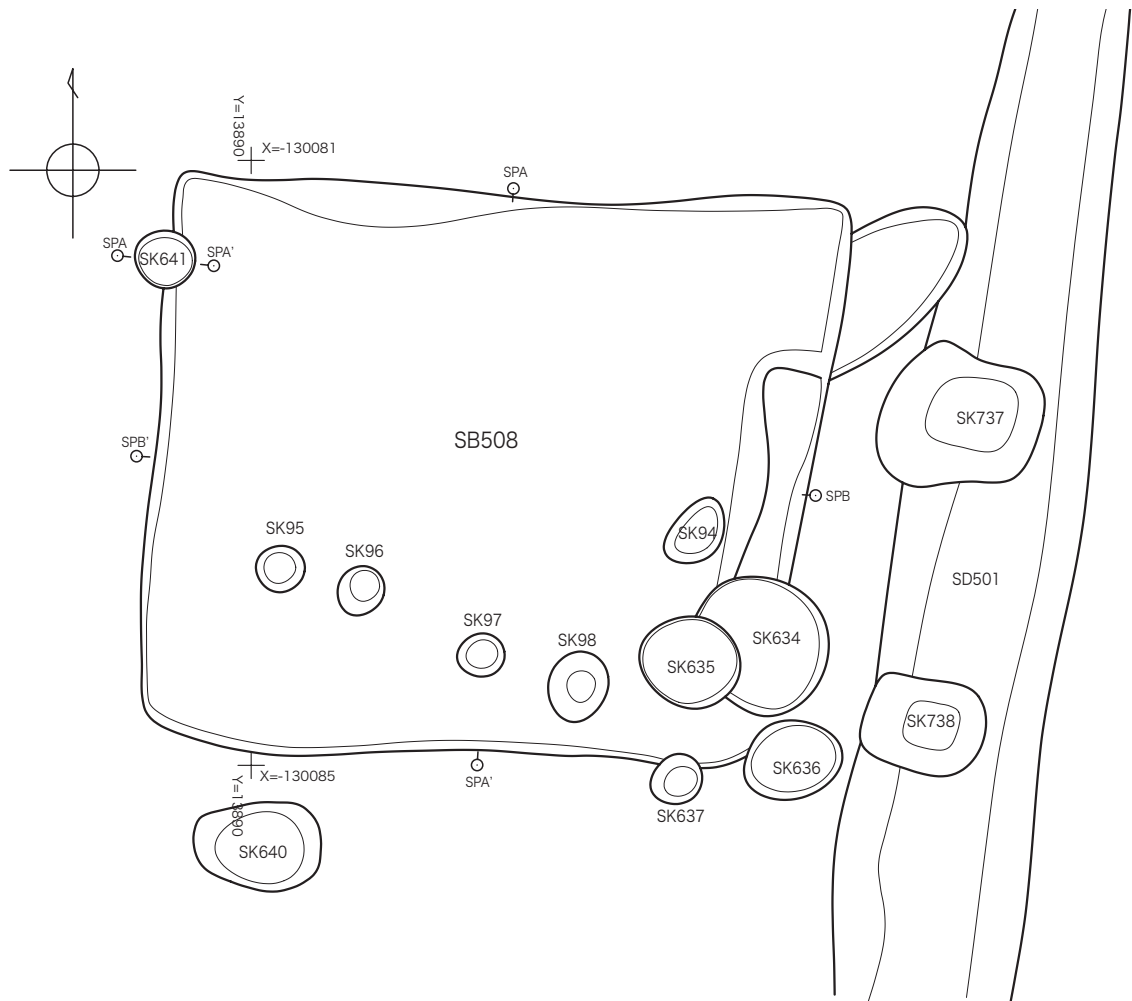
L=37.00m



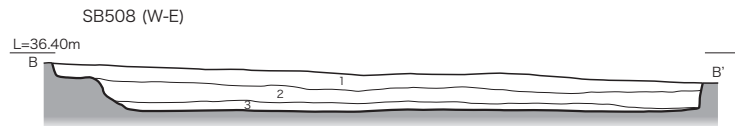
- 1 7.5YR4/2 灰褐色シルト
- 2 10YR5/6 黄褐色シルト
- 3 10YR6/8 明黄褐色シルト
- 4 5YR6/6 橙色シルト (SK76)
- 5 7.5YR4/2 灰褐色シルト
- 6 10YR6/8 明黄褐色シルト (P77)
- 7 10YR6/8 明黄褐色シルト
- 8 10YR5/6 黄褐色シルト
- 9 7.5YR4/2 灰褐色シルト
- 10 10YR6/8 明黄褐色シルト (貼床)
- 11 7.5YR4/2 灰褐色シルト
- 12 10YR5/6 黄褐色シルト
- 13 10YR6/8 明黄褐色シルト (貼床)



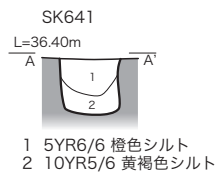
第21図 S B 507平・断面図 (1/50)



- 1 7.5YR4/2 灰褐色シルトより少し暗い
- 2 7.5YR4/2 灰褐色シルト
- 3 10YR5/6 黄褐色シルト
- 4 10YR6/8 明黄褐色シルト (貼床)
- 5 7.5YR4/2 灰褐色シルト (SK97)



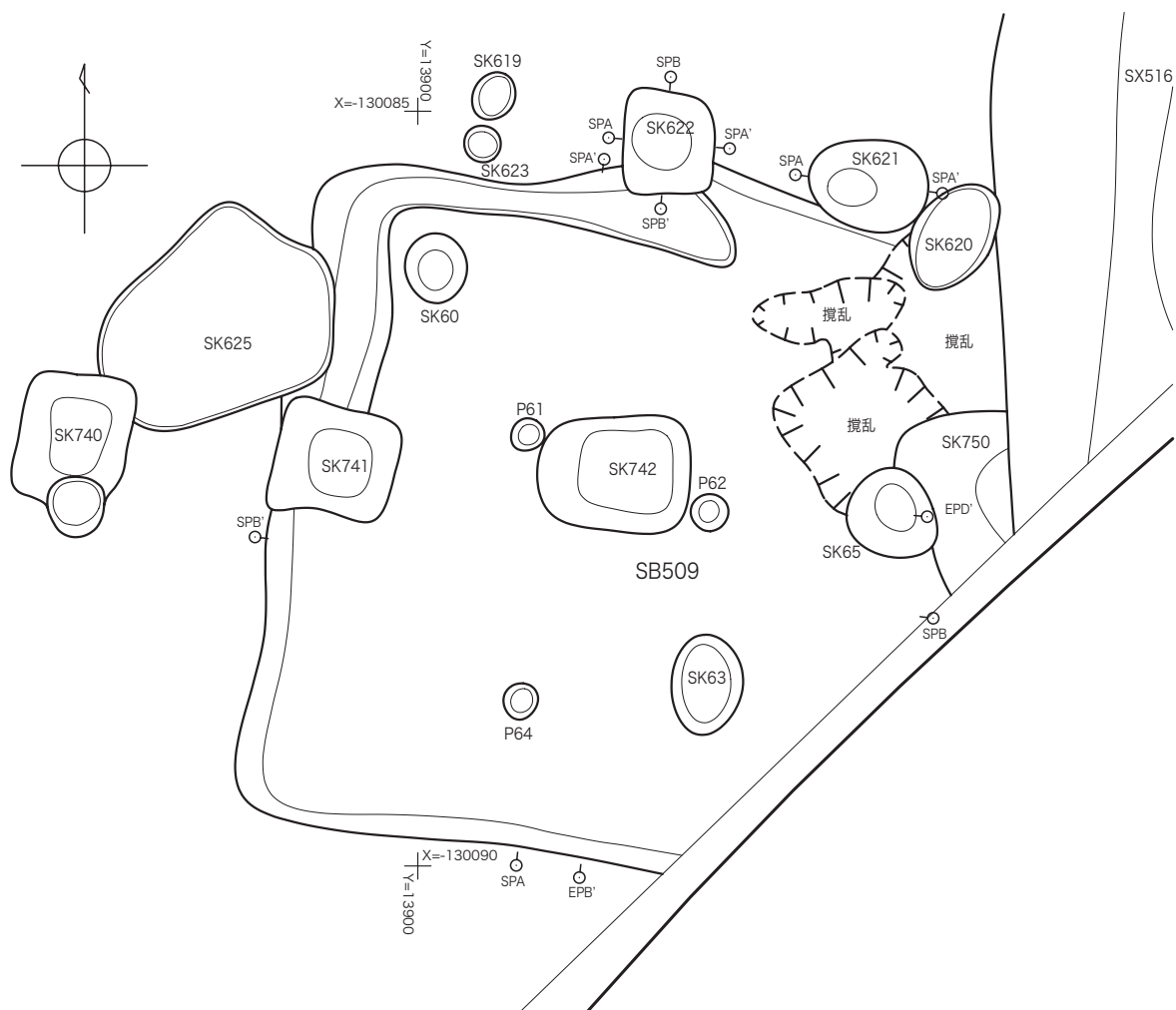
- 1 7.5YR4/2 灰褐色シルト
- 2 10YR5/6 黄褐色シルト
- 3 10YR6/8 明黄褐色シルト (貼床)



- 1 5YR6/6 橙色シルト
- 2 10YR5/6 黄褐色シルト

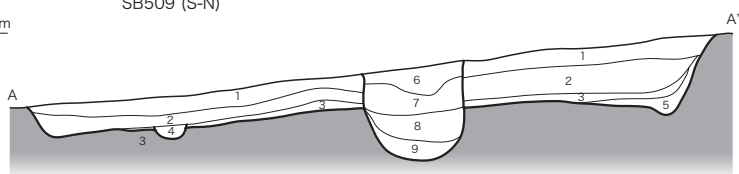
第22図 S B 508平・断面図 (1/50)

高坂遺跡



SB509 (S-N)

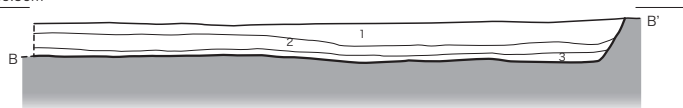
L=36.10m



- 1 7.5YR4/2 灰褐色シルト
- 2 10YR5/6 黄褐色シルト
- 3 10YR6/8 明黄褐色シルト
- 4 5YR6/6 橙色シルト (P64)
- 5 3 より少し明るい
- 6 1 より少し暗い (SK742 の埋土)
- 7 2 より少し暗い (SK742 の埋土)
- 8 7 と 4 の斑土 (SK742 の埋土)
- 9 5YR5/6 橙色シルト (SK742 の埋土)

SB509 (E-W)

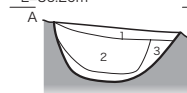
L=39.50m



- 1 7.5YR4/2 灰褐色シルト
- 2 10YR5/6 黄褐色シルト
- 3 10YR6/8 明黄褐色シルト (貼床)

SK621

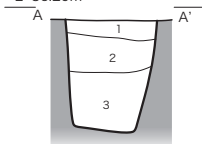
L=36.20m



- 1 7.5YR4/2 灰褐色シルト
- 2 7.5YR4/2 灰褐色シルトと
10YR6/8 明黄褐色シルトの斑土
- 3 10YR6/8 明黄褐色シルト

SK622

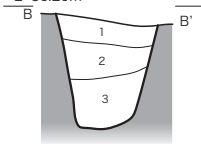
L=36.20m



- 1 7.5YR4/2 灰褐色シルト
- 2 10YR5/6 黄褐色シルト
- 3 5YR6/6 橙色シルト

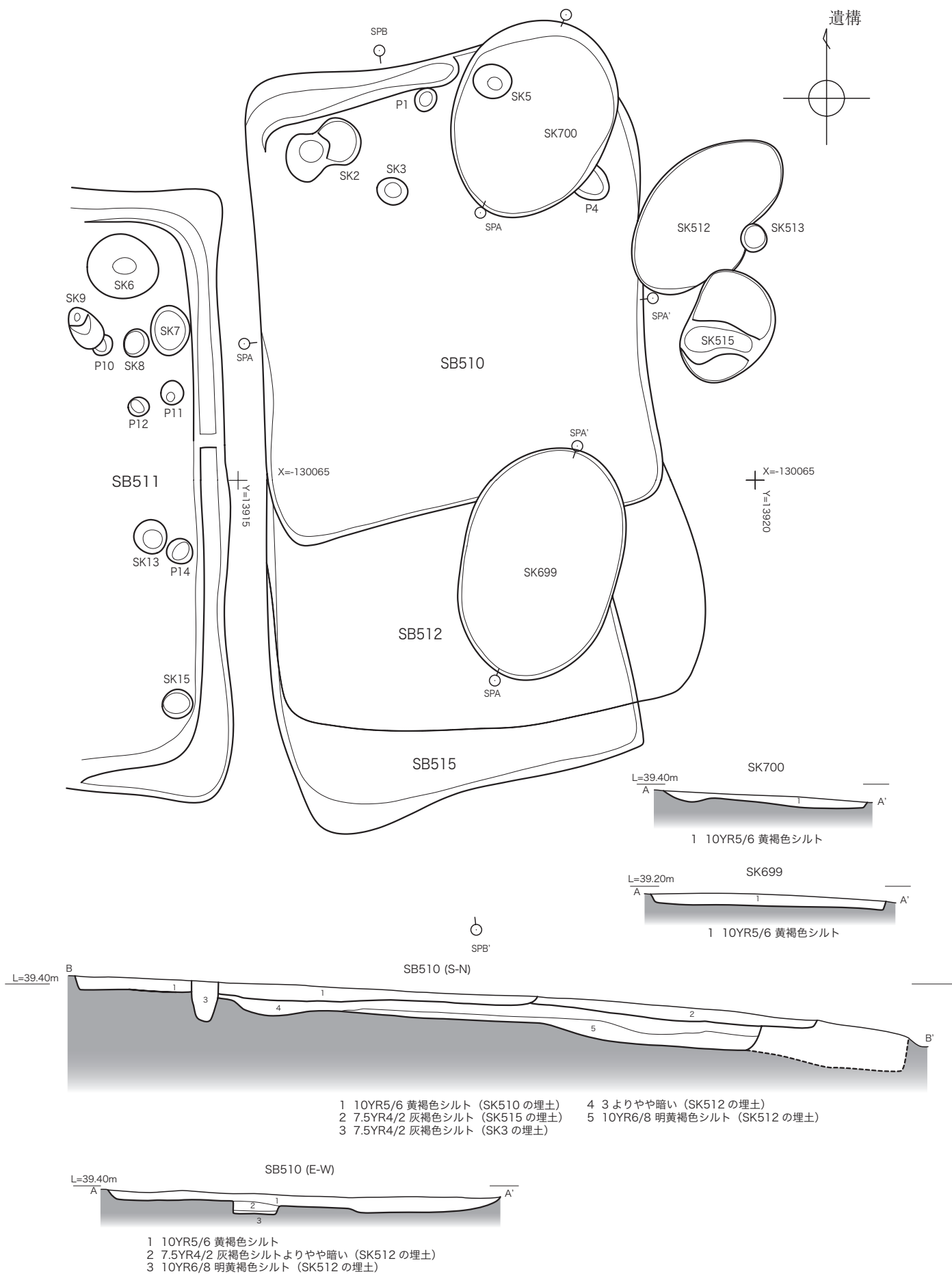
SK622

L=36.20m

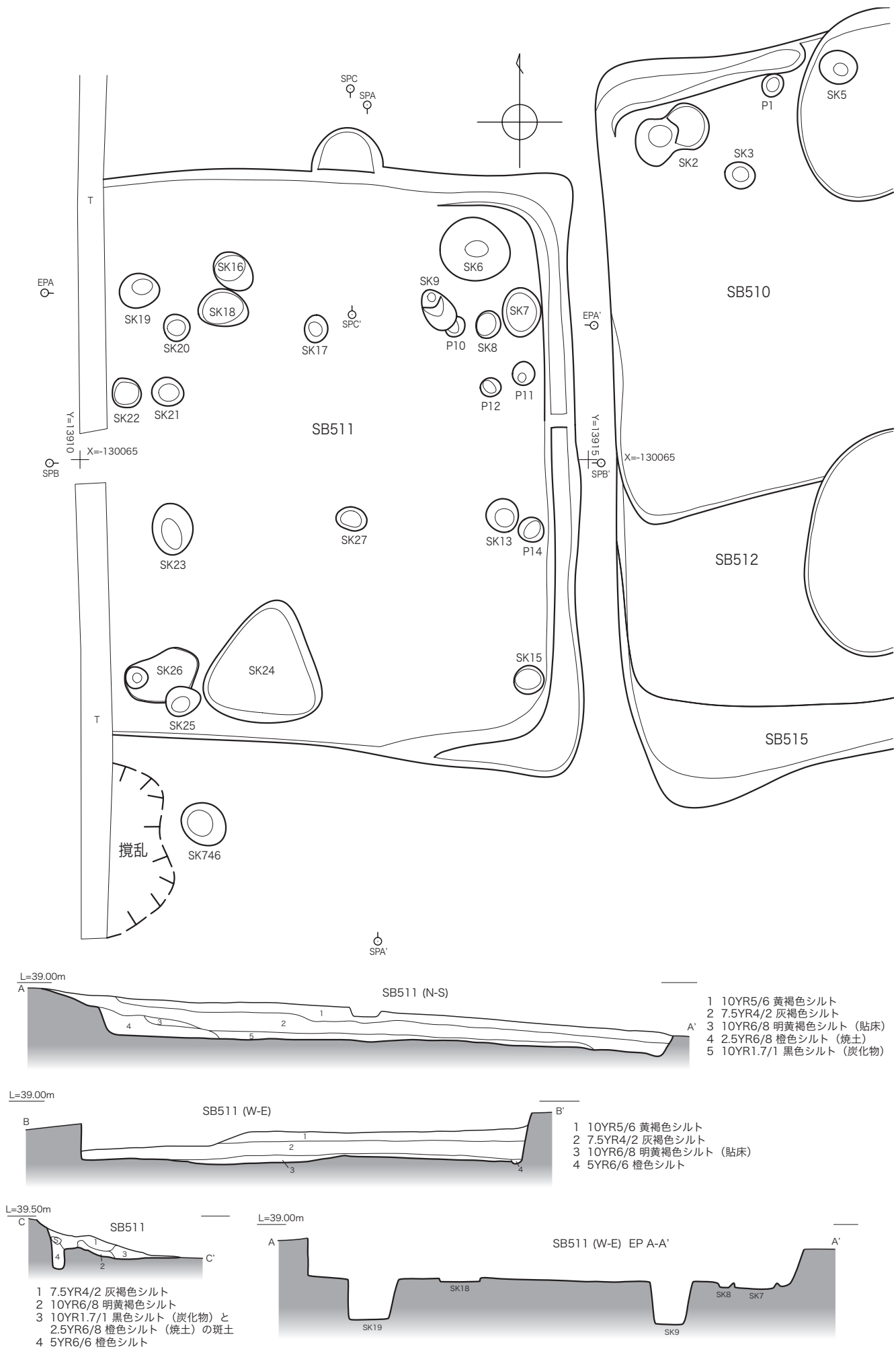


- 1 7.5YR4/2 灰褐色シルト
- 2 10YR5/6 黄褐色シルト
- 3 5YR6/6 橙色シルト

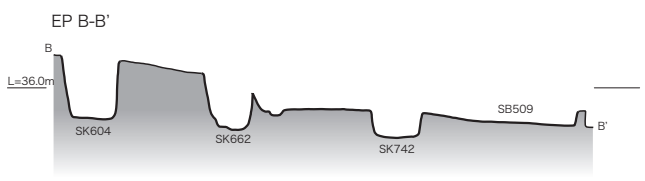
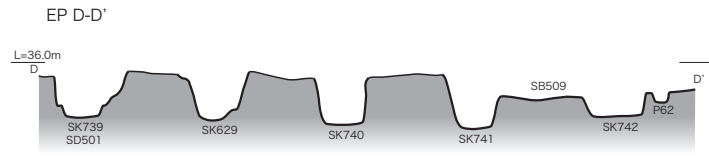
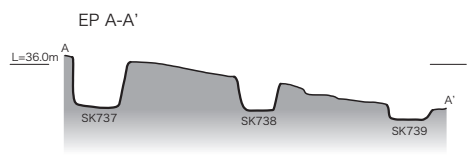
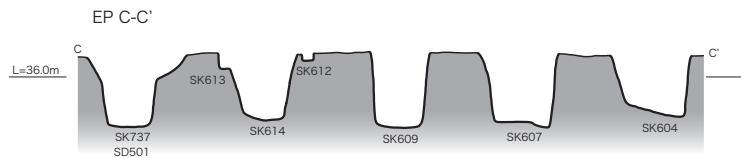
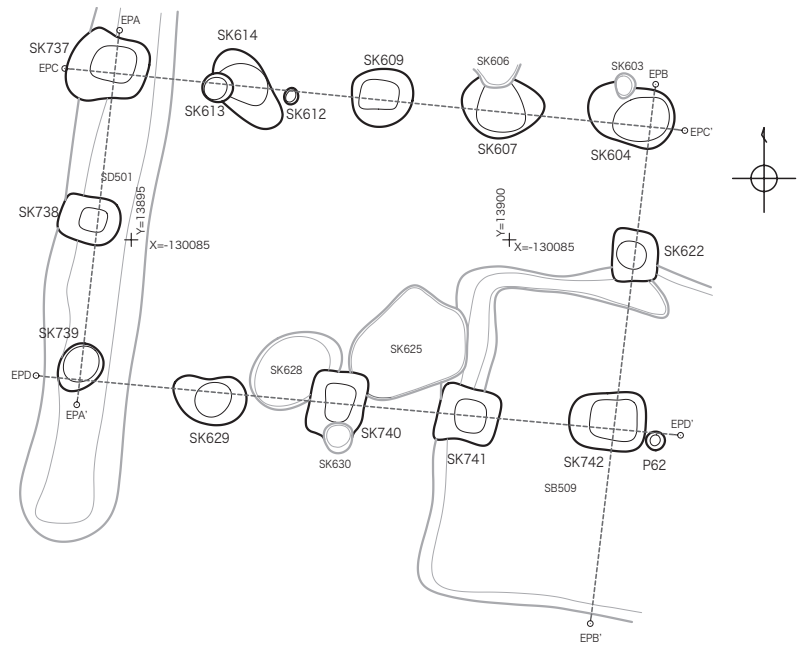
第23図 S B 509 ・ S K 621 ・ 622 平 ・ 断面図 (1/50)



第24図 SB510・515平・断面図 (1/50)

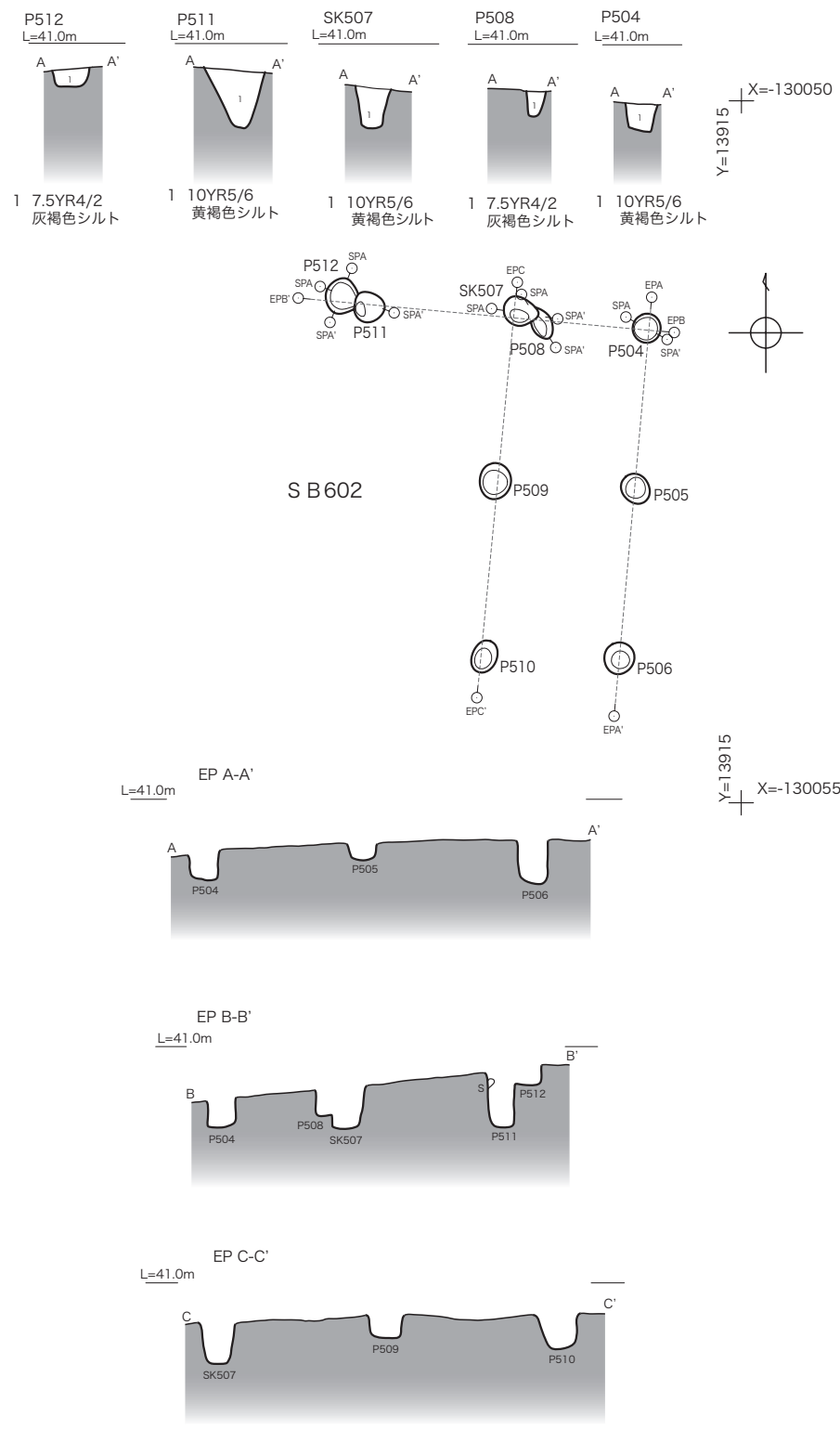


第25図 SB511平・断面図 (1/50)

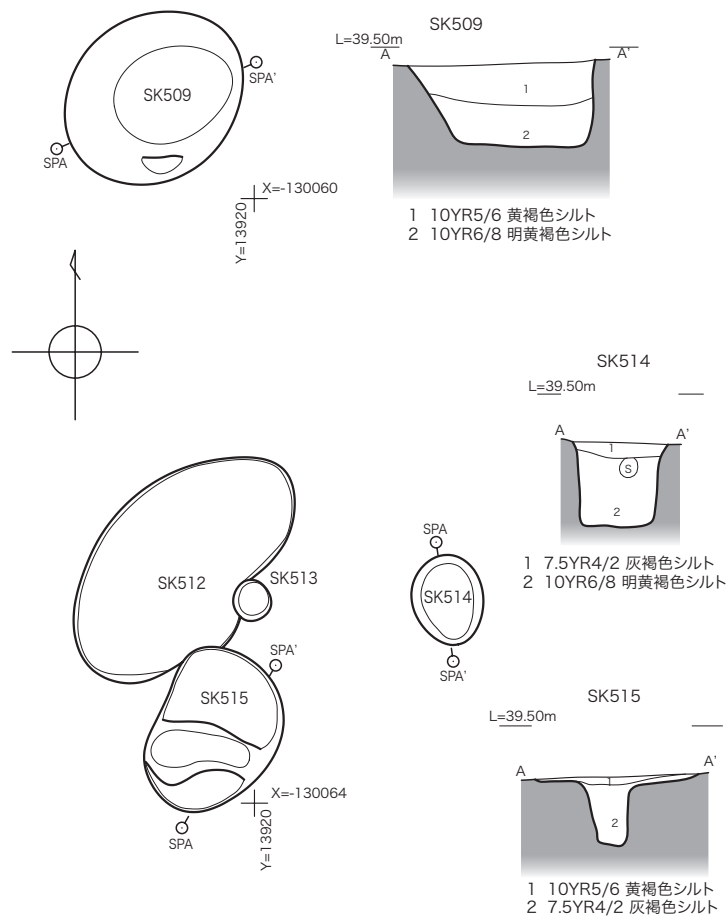


第26図 S B601平・立面図 (1/100)

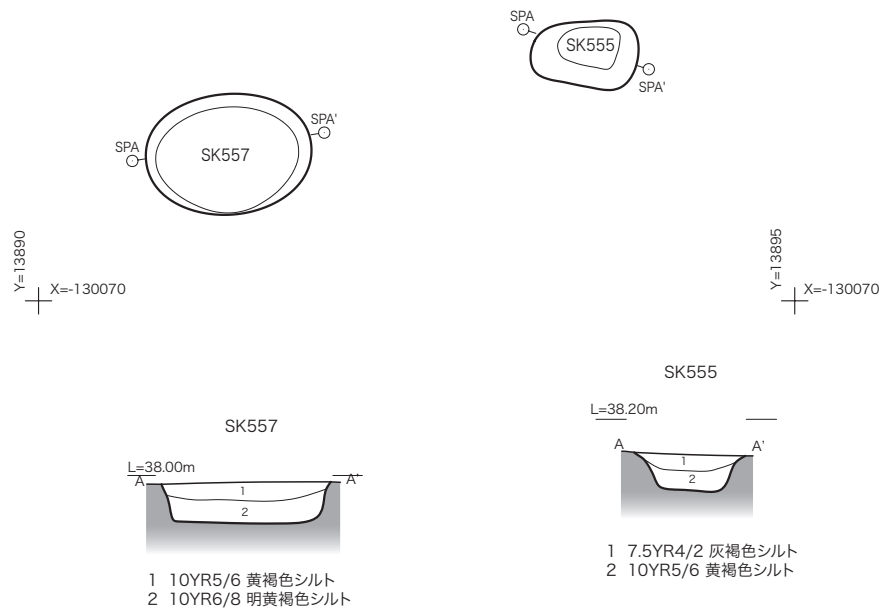
高坂遺跡



第27図 S B 602平・立面図 (1/50)

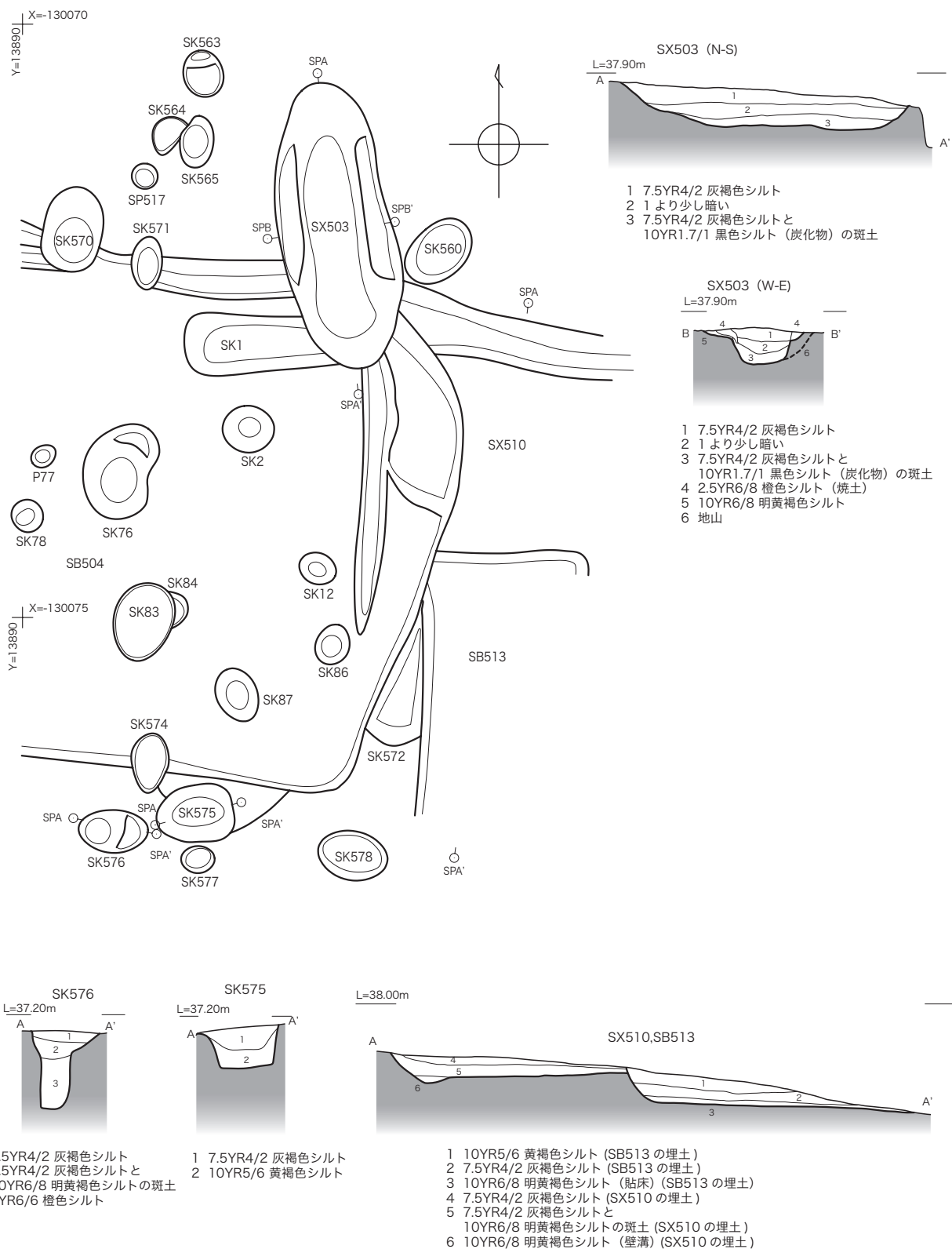


第28図 S K 509・514・515平・断面図 (1/50)

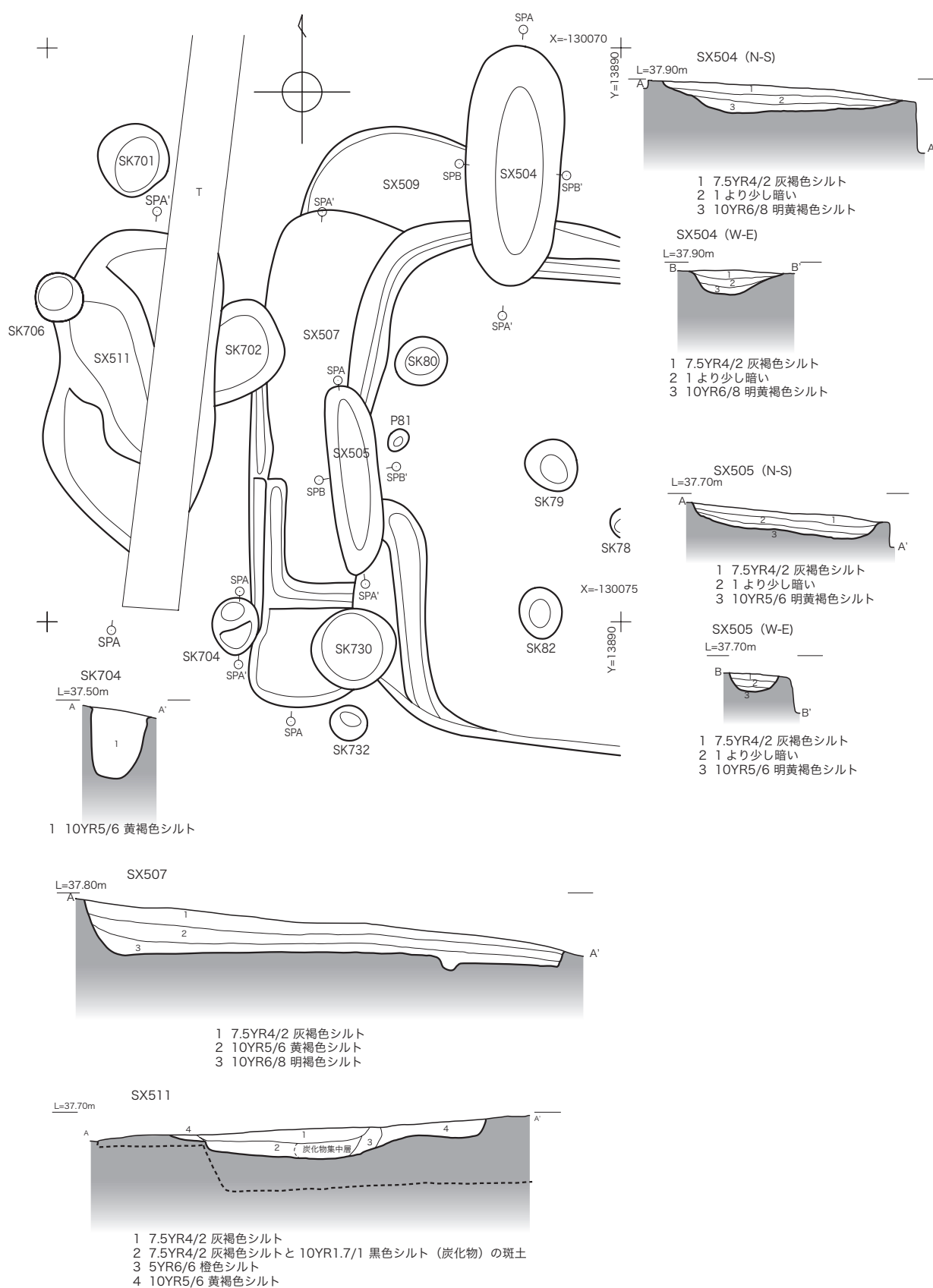


第29図 S K 555・557平・断面図 (1/50)

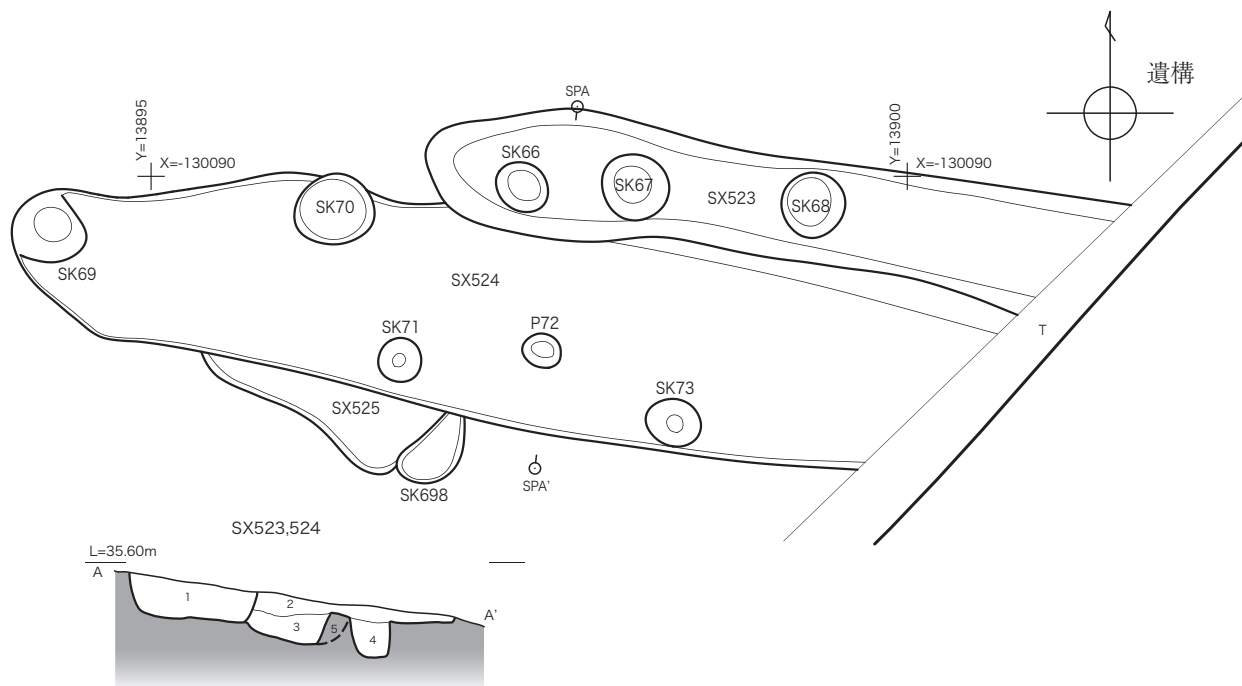
高坂遺跡



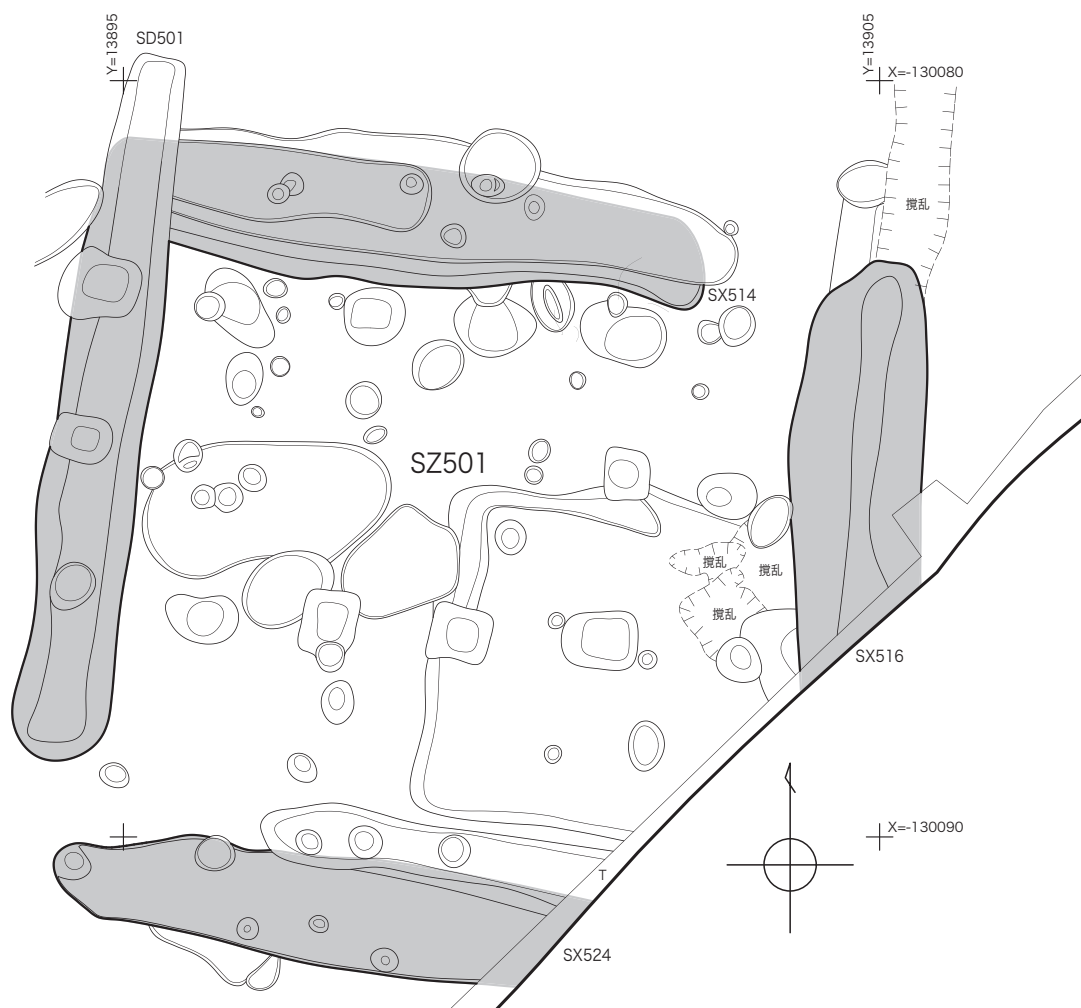
第30図 S X 503・510・S K 575・576平・断面図 (1/50)



第31図 S X504・507・511・S K704平・断面図 (1/50)



第33図 S X523・S X524平・断面図 (1/50)



第34図 S Z501平面図 (1/100)

第Ⅴ章 遺 物

第1節 概要

今回の高坂遺跡における調査では、先にも述べたように出土遺物がかなり少ない調査結果となった。原因としては、いわゆる遺物包含層というものがわずかしきみとめられず、ゆるい斜面が平坦地を確保するために削平され続けたことなどが考えられる。北側の04区においては、一定量の遺構が出土しているが、遺物をともなうものが少なく、99区へと地点が南になるほど遺構は希薄になり、出土遺物がさらに少ない結果となった。

出土遺物の時期的比率を古い順に挙げると、まず、弥生時代末～古墳時代初頭の土器がみられる。これらに続くものは、7世紀代以降の須恵器がみられ、平安時代の灰釉陶器、中世の土器、戦国時代以降の陶磁器、土製品等も少ないながら確認された。

弥生時代末から古墳時代初頭の遺物がみとめられた遺構は、竪穴住居跡を主体とし、わずかに方形周溝墓からも検出された。一括して廃棄された土器がまとまって出土した竪穴住居跡（S B02）や、これと同時期と思われる方形周溝墓から、この時期の遺物が出土している。この時期の遺構数は少ないが、99・04両調査区の中では、遺存度の良好な遺物がまとまっている。器種は、壺・甕を主体とし、少ないながら高坏、小型製品もみとめられた。

古代の遺物では、須恵器、土器が竪穴住居などから検出され、7～8世紀代にあたるものを主体とし、器種は杯を主体とし、もみとめられた。

中世の遺物では、04区における土坑から土器皿が検出されたが、局部的でその他の地点からはわずかに検出された程度である。

戦国時代以降の遺物は、溝状の落ち込み、遺物包含層からわずかに検出された程度で、まとまって出土する例は見られなかった。

ここでは、時期の把握がある程度可能な遺物について、時期別に説明する。なお、遺物が比較的まとまって出土した遺構については、それぞれの遺構ごとに説明する。

第2節 時期別出土遺物

第1項 弥生時代末から古墳時代初頭

99区SB02

壺 1は加飾太頸壺の口縁部で、全体にやや磨滅している。端面は下端に粘土が付加されて垂直な面となし、イタによる羽状の刺突後に竹管による連続刺突が施されている。また内面端には粘土の剥離したような痕跡がみられる。2・3は無飾の太頸壺で住居床面上から出土している。2の口縁端部は欠損しているが、粘土の剥離痕が観察により、やや下方に折り返される端部になると考えられる。体部最大径は中位より下になる。3は口縁部がゆるやかに外反し、端部がわずかに下方に折り返される。

口縁部外面はイタナデ、体部内面はハケ・ナデ調整される。4は逆ハ字状に開く口縁部をもつ太頸壺で、端部がやや肥厚して丸い面をなす。頸部のやや下位に断面三角形の突帯が巡らされる。胎土には細かい雲母が多く含まれる。6～9は太頸壺の体部～底部で、6・8・9は住居床面上から出土している。7の外面にはわずかではあるが赤彩された痕跡が残る。9の底部外面には、直線状のヘラ沈線があり、その上に一部分粘土が付着している。10・11は丸い体部をもつ直口壺で、11は住居床面上から出土している。10は頸部が広く、11は絞り成形されている。11の体部内面には、上位は指ナデ、中位はイタナデ、下位はハケ調整が施され、粘土紐の積み上げ痕が観察される。12～14はヒサゴ型壺で、12・13は住居床面上から出土している。13・14は、口縁端部がヨコナデによってつまみ上げられて内傾する面をもつもので、14は体部中位に内面より敲打された穿孔がみられる。15・16は指押圧・ナデによって整形・調整されているミニチュア土器である。17は手焙り型土器で、受口状口縁鉢に覆部が乗る。覆部の前面の開口部下端は鉢口縁部まで延びていたと思われるが、大部分が欠損しており、わずかな粘土が残るのみである。覆部外面はハケ、内面は指指押圧・ナデ調整される。鉢部は中位やや下に最大径がくるもので、その部分に低い断面三角形の突帯を巡らし、イタによる斜位の連続刺突がなされる。調整は体部外面中位から下位に斜位のハケが施されて後、上位に横位のやや粗いハケが施され、内面はやや幅広の横位のナデ調整がなされる。また体部下位には内面より敲打された穿孔がある。底部外面には不定形な格子状のヘラ沈線がみられる。

甕 18は全形がわかる甕で、住居床面上から出土している。口縁部はく字状に屈折し、端部は丸く収束する。外面は口縁部から体部上位はナデ・ヨコナデ調整、体部中位～下位にかけては斜位のハケ調整、脚部はナデ・ヨコナデ調整がなされる。内面はヨコナデ・イタナデ調整が施される。19・20は口縁部がほぼ上方に延びるもので、20は体部最大径が口縁部径より小さくなる。19は口縁部端が水平の面をもち、磨滅が激しいが、ハケ調整がなされていると思われる。20は口縁端部がわずかに内傾する面をもつもので、口縁部外面と体部外面に粗いハケがなされる。21は住居床面上から出土したもので、く字状に折れる口縁部の端部角に刺突が施される。22・23は受口状を呈する口縁部である。22は外面がわずかな段となり、端部は丸く収束する。23は口縁部がやや長く、端部がヨコナデにより内側に屈折する。両者とも磨滅のため調整は不明。24・25は甕脚部で、24はやや内湾し、25は八字状に外反する。両者とも磨滅のため調整は不明である。

高坏 26・27は全形がわかる高坏であるが、両者とも磨滅しているため調整は判然としない。また27は住居床面上より出土している。26は坏受け部が短く、口縁部が内湾しながら斜位に延びるもので、端部はヨコナデによってつまみ上げられて内傾する面をもつ。脚部は頸部から直ぐに内湾して延び、端部にわずかなヨコナデ調整がなされる。上位に1孔×3方向の透し穴が開く。27は坏受け部がやや立ち上がるもので、口縁部は内湾して上方に延び、端部がヨコナデによってわずかにつまみ上げられている。脚部は下部がやや内湾し、上位に1孔×3方向の透し穴が開く。28・29・31は坏部で、住居床面上より出土している。28・29は端部がヨコナデによってつまみ上げられている。30・32は頸部で、32は住居床面上から出土している。33～36は脚部で、36は住居床面上から出土している。33は下部が内湾しており、柱状の上部にクシによる直線文が描かれる。34は直線的にハ字状に延び、35・36は下部が大きく外反し、高さが低い。各々1孔×3方向の透し穴が開くと思われる。また35では、絞り成

形によって螺旋状を呈する層状の粘土紐痕が観察される。

04区SZ501 37の口縁部は外湾して逆八字状を呈し、端部はわずかに肥厚して丸く収束する。体部はほぼ円形を呈し、底部がわずかに突出する。全体に磨滅しているが、外面はナデ・イタナデ調整、内面はイタナデ調整されていると思われ、内面には粘土紐の積み上げ痕が明瞭に残っている。

04区SK555 38は下部が内湾する高坏脚部で、上部にクシ直線文が施される。

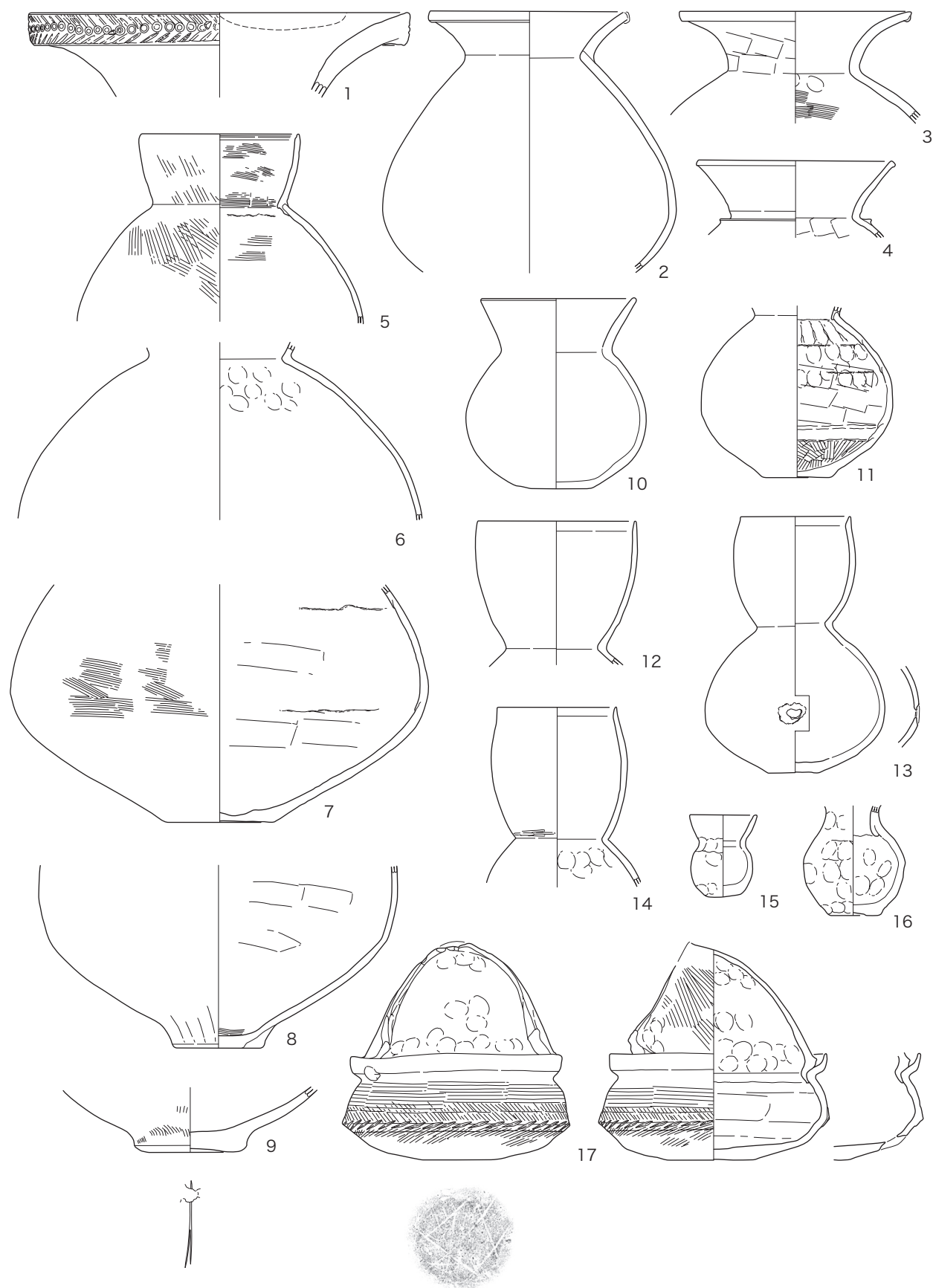
04区SX526 39は口縁部がやや上方に延びるS字状口縁甕であるが、調整は磨滅のため不明である。40は口縁部が体部との明瞭な屈折点をもたずに上方に延びる甕で、体部は縦長の楕円形を呈すると思われる。外面は指押圧痕が残り、わずかにハケ調整の跡もうかがえる。内面には粘土紐積み上げ痕が明瞭に観察できる。

第2項 古代以降

43～65は、99区出土の古代以降に位置付けられる遺物である。43はS B 03から出土した土器鍋の把手である。44～47は、S K 53出土遺物である。44は土器甕、45は土器鍋で、いずれも三河型のつよく外反する口縁部で、8世紀後半の形態的特徴を有する。45は把手を有する。46は腰部が曲線的な須恵器の小椀で、井ヶ谷78号窯式期の様相がみとめられる。47は須恵器の椀で、折戸10号窯式期の様相がみとめられる。48・50・51・55は、土器甕である。51はS X 04出土の口縁端部が肥厚した清郷型の甕で、9世紀前半の様相がみとめられる。48・50・55は、三河型の土器甕で、48はS K 54、50はS X 02、55はS X 09からの出土であり、口縁部が水平方向に外反する8世紀の形態的特徴がみとめられる。49はS K 59出土の須恵器杯である。断面形態は、体部から口縁部にかけて開く。胎土の粗い質感から、湖西産の7世紀後半の様相がみとめられる。S X 09からは、54の須恵器杯も出土しており、曲線的な断面形態から折戸10号窯式期の様相がみとめられる。52・53は、S X 08出土の須恵器で、52は高杯の脚部、53は杯身である。どちらも、東山50号窯式期の様相がみとめられる。56～58は、土鍾である。57～65は検出または表面採集遺物である。61は須恵器杯身で、底部の調整がなされておらず、口縁端部も鋭角的でないことから、7世紀後半の湖西産の様相がみとめられる。62は須恵器杯で、器面の調整が全体的にしていねいに施されており、折戸10号窯式期の様相がみとめられる。63は須恵器の甕で、胎土が砂質で荒い波状文が施されており、7世紀代の湖西産の様相がみとめられる。64は丸軀の石帯で、裏面には二孔一対の穿穴が不規則に三ヶ所穿たれていて、そのうちの一ヶ所は欠損部断面に位置する。裏面は面取り程度であるが、その他はていねいに磨き込まれている。緑灰色を呈し、材質は泥岩である。

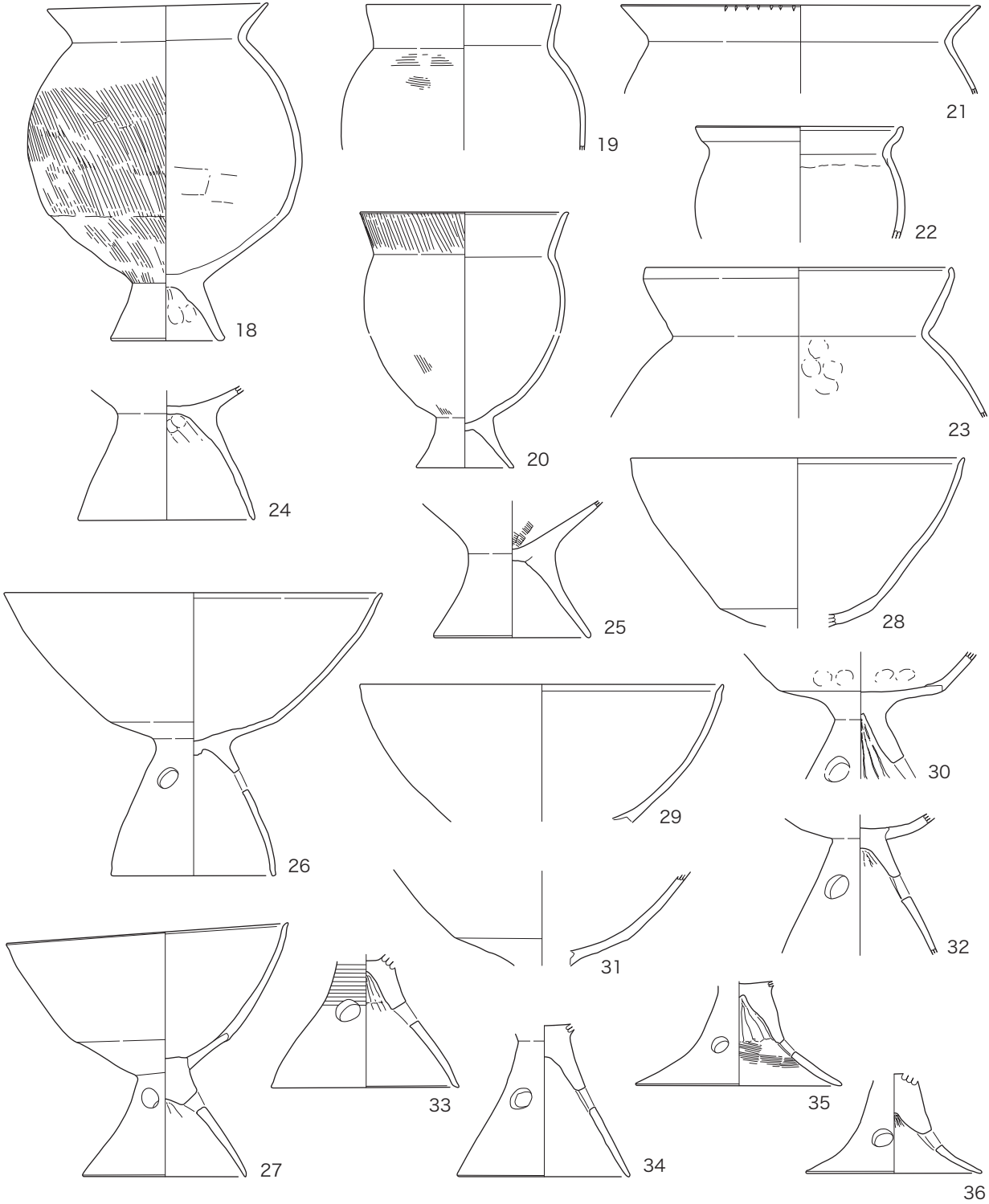
66～106は、04区出土の古代以降に位置付けられる遺物である。66～68はS B 502出土遺物である。66は、土器鍋の把手である。67は須恵器鉢で、鉄鉢形の丸底を呈するものと思われ、湖西産の7世紀後半の様相がみとめられる。68は、土器甕である。69～73は、S B 504出土遺物である。69は湖西産の須恵器杯身と思われるが、内面の調整が粗く口縁端部が肥厚しているので、蓋の可能性も考えられる。70は土器甕、71～73は土鍾である。74～77は、S B 507出土遺物である。74は土器鍋で、75・77の杯、76の高杯はいずれも湖西産と思われる須恵器である。7世紀後半の様相がみとめられる。78・79は、S B 508出土の湖西産と思われる須恵器である。78は杯蓋で、79は断面形態が曲線的で低く太めの高台を有する杯である。8世紀前半の様相がみとめられる。80～82はS B 511出土の、湖西産と考えられる

須恵器である。80は杯蓋で、81は椀、82は細頸瓶と思われる。7世紀後半の様相がみとめられる。83・84はS B 512出土遺物で、83は土錘、84は返りのない須恵器の杯蓋である。胎土の特徴から、湖西産の可能性が考えられる。85はS B 514出土の、湖西産と考えられる須恵器壺である。焼成不良の製品と思われ、7世紀後半の様相がみとめられる。86～88はS K 509出土の土器皿である。いずれも非ロクロ成形で、86は口径約12cm、平坦の広い底部で、口縁部は外反し、内・外面ともにナデ調整が施されている。87・88は広い底部から、口縁部は浅く内彎する。どちらも、底部外面を除いて、ナデ調整が施されている。89・90は、S K 527出土遺物である。89は、金属器を意識した形状の須恵器椀で、湖西産の7世紀末から8世紀前半の様相がみとめられる。90は、須恵器杯身である。92は、S K 632出土の灰釉陶器と思われる椀である。焼成不良で器面の観察が困難だが、施釉の痕跡はみとめられない。高台の断面形態は、三日月形が退化する段階と思われる。94は、S X 503出土の須恵器杯身である。底部調整の痕跡が明瞭にみとめられず、湖西産の7世紀後半の様相がみとめられる。95は、S X 504出土の灰釉陶器椀である。椀としては法量が大きい。96・97は、S X 513出土の須恵器高杯である。湖西産の7世紀後半の様相がみとめられる。100は、S D 501出土の戦国時代と思われる土器内耳鍋で、口縁部付近の断面形態は「く」字状を呈し、東三河地域的な様相がみとめられる。105は、検出作業から出土の土器皿で、口径は約8cm、内面にナデ調整が施されている。106は、検出作業から出土の天目茶碗で、外側高台脇にも化粧掛けが施されており、大窯Ⅱ期的様相がみとめられる。



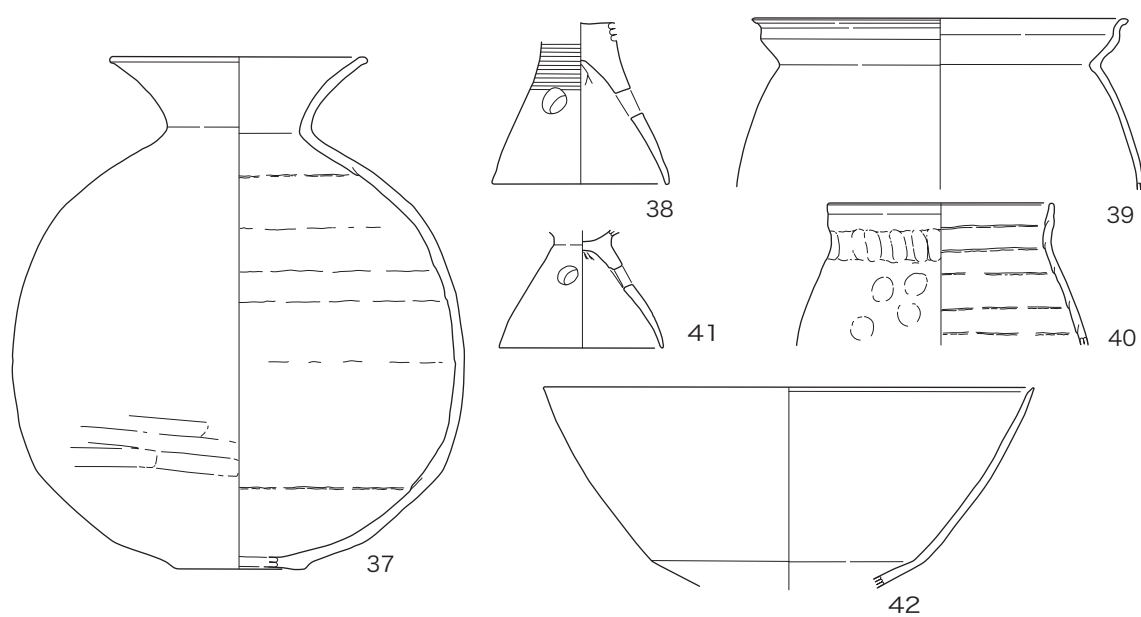
第35図 出土遺物実測図 (1)

99B区SB02(1~17)



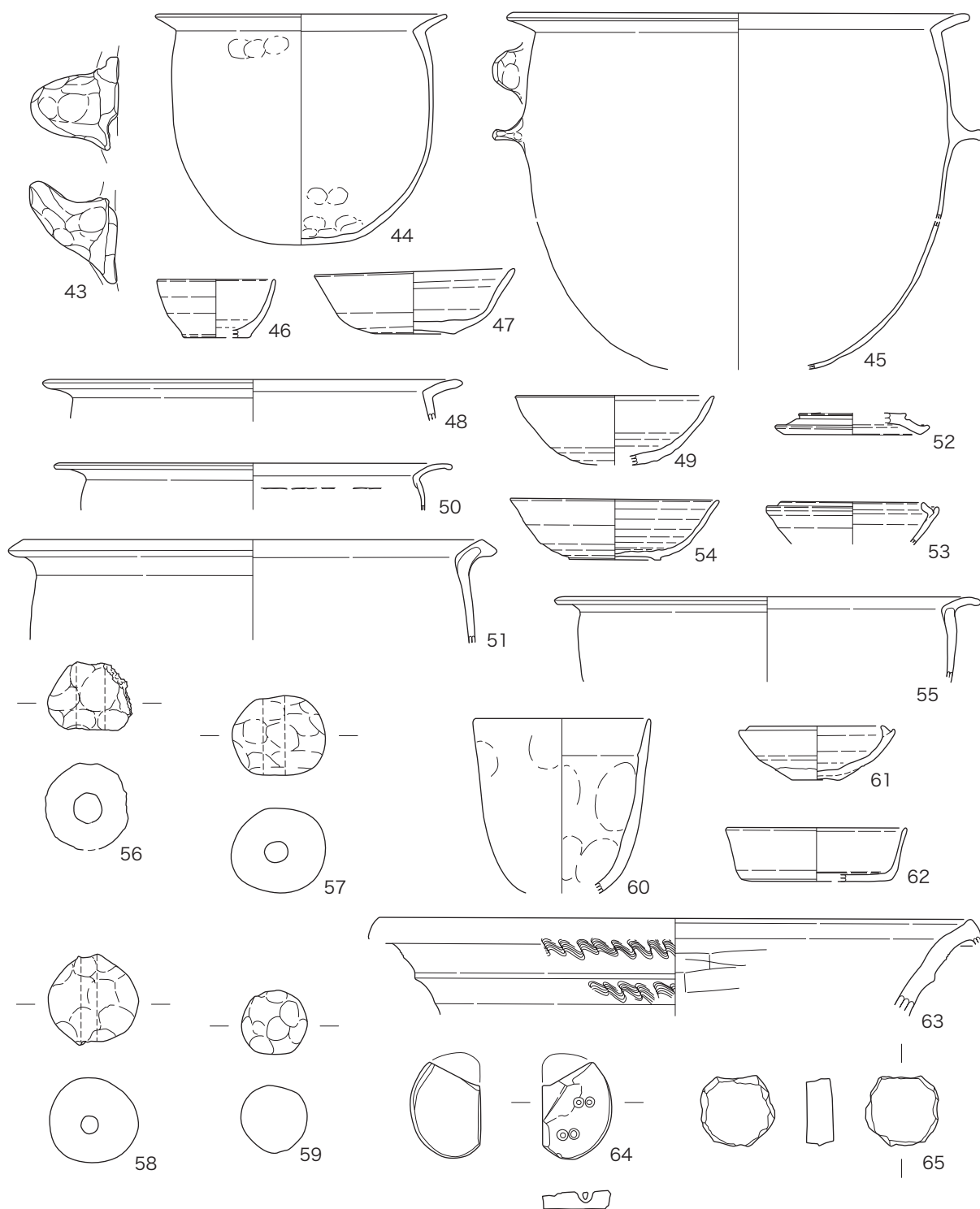
99B区SB02(18~36)

第36図 出土遺物実測図 (2)



第37図 出土遺物実測図 (3)

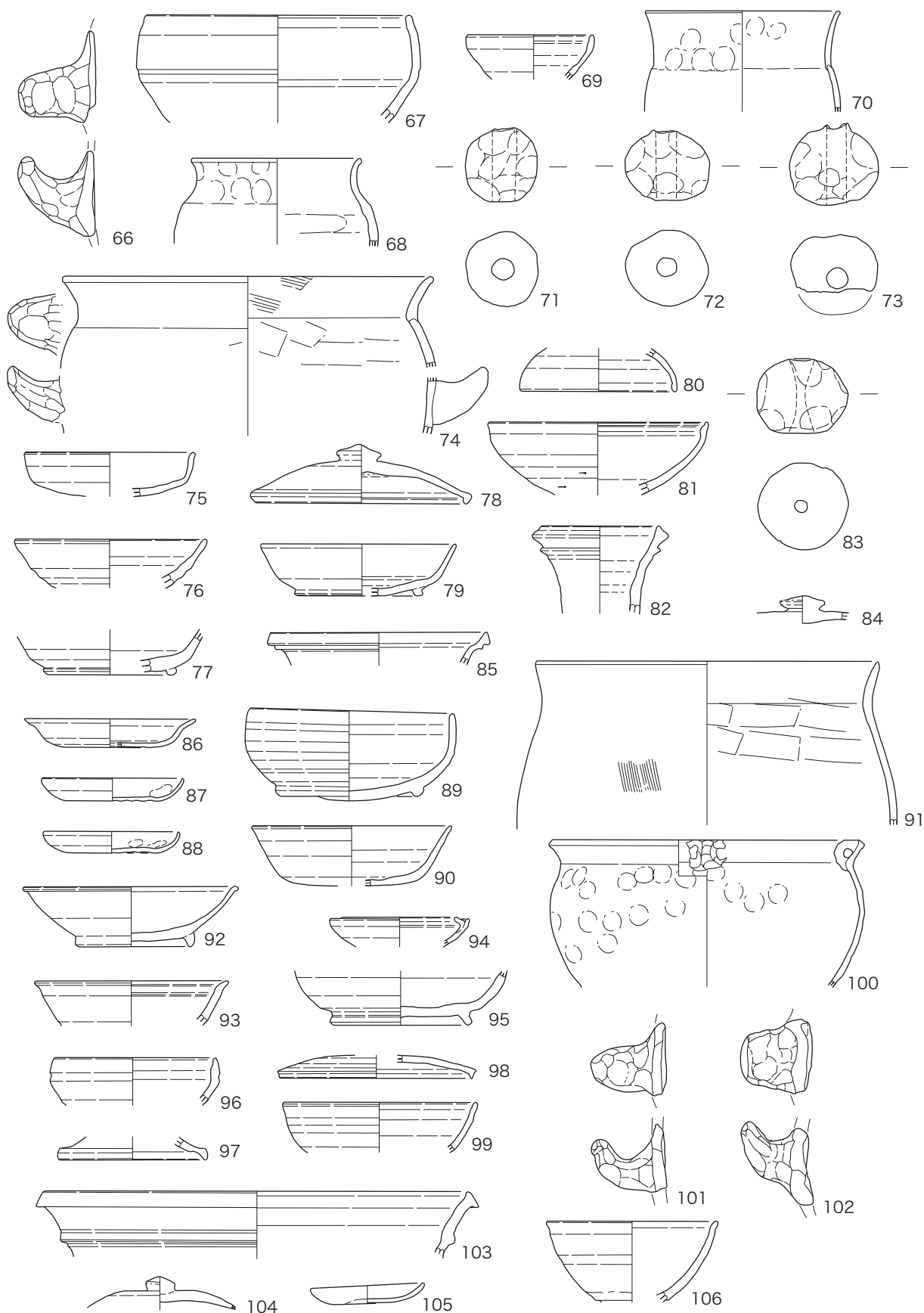
04区SZ501 (37)、SK555 (38)、SX526 (39・40)、検出 (41・42)



第38図 出土遺物実測図 (4) (56~59・64・65は1/2、他は1/4)

99区SB03(43)、SK53(44~47)、SK54(48)、SK59(49)、

99区SX02(50)、SX04(51)、SX08(52・53)、SX09(54・55)、SX14(56)、表採・検出(57~65)



第39図 出土遺物実測図 (5)

04区SB502(66~68)、SB504(69~73)、SB507(74~77)、SB508(78・79)、SB511(80~82)、SB512(83・84)、SB514(85)
 04区SK509(86~88)、SK527(89・90)、SK586(91)、SK632(92)、SX502(93)、SX503(94)、SX504(95)、SX513(96・97)、SX524(98・99)
 04区SD501(100)、礫群列(101)、検出(102~106)

第Ⅵ章 まとめ

今回の調査では、遺物の一括性がみとめられた遺構は、99区のS B 02程度であり限定された。全体としての調査成果では、遺物の出土量は少ないながらも、弥生時代末～古墳時代初頭、古代、中～近世の人々の足跡として、遺構、遺物が検出できた。こうした検出資料の中では、各時代を通じて情報量が少ないために、遺構から景観が推測できるような空間的特質について、調査成果を元に言及できるレベルには至っていない。ただし、今回報告した高坂遺跡の周辺では、これまでに本センターによって石堂野遺跡、石堂野B遺跡といった調査地点が、数百mの距離に位置しているため、これらの調査成果と照合することによってある程度の推測が可能となる。ここでは、各時期の検出遺構の中で、出土遺物から時期が有る程度判断できたものを中心として、それらがどのような目的を意図してつくられたのかを考え、出土遺物から推察できる状況も考慮しながら、当該期の空間的な特質を推測してみたい。

高坂遺跡の弥生時代から古墳時代初頭の遺構としては、99区のS B 02、S Z 501があげられる。竪穴住居跡、方形周溝墓ともに、調査区内では1基のみの検出であったため、集落、墓域としての広がり判断できなかった。この時期のものとしては、石堂野B遺跡にて竪穴住居跡が3棟近接して検出されていて、出土した遺物は器種の構成も偏ることなく、被熱痕が顕著に観察されたわけではないので、比較的安定した生活が推測された。そうした状況と、この住居跡から数十mの距離を置いて方形周溝墓が位置する点では、99区のS B 02、S Z 501との関係と一致する。さらに石堂野B遺跡から北北西約300mに位置する石堂野遺跡でも、主体ではないものの、弥生時代から古墳時代初頭と思われる住居跡が検出されている。時期はいずれも欠山期のものであり、石堂野遺跡、石堂野B遺跡、高坂遺跡と併せた空間が、弥生時代末から古墳時代初頭の時期において、居住空間として選択されるだけの環境であったと思われる。さらに、高坂遺跡、石堂野B遺跡で検出された中規模の方形周溝墓を考慮すると、墓域を擁する一定の集団の生活が想起される。石堂野B遺跡の立地する舌状台地と、それを見下ろすゆるやかな斜面に位置する石堂野遺跡、高坂遺跡付近では、墓域を擁して密集することなく生活を営むような集団の存在も考えられる。

古墳時代前期・中期の遺構は、今回の高坂遺跡99区、04区ともに、明確なものは見出せなかった。石堂野B遺跡では、古墳の周溝基底部の可能性も考えられる溝が検出されており、円筒埴輪片が出土した遺構も見られる。高坂遺跡から西側に600mほどの地点には、全長16mの円墳（穴観音古墳）があり、南東方向に700mほどの地点には、全長約37mの前方後円墳（船山古墳）が所在するため、高坂遺跡直下の台地上には、当該期の墓域が扇状に展開していた可能性も考えられる。こうした直下の空間と高坂遺跡の相対する空間的特質は、今後の追加資料も含めて検討する必要があるであろう。

古代の遺構、遺物は、出土遺物が少ないながら、特に04区において主体的である。中でも竪穴住居は、

高坂遺跡

概ね7世紀後半～8世紀前半と思われる湖西産の須恵器片が含まれ、ゆるやかな南向きの斜面に対して並列するように展開する。竪穴住居跡の可能性を含んだ遺構も含めると、十数棟が等高線に並ぶように二重に展開していて、少なくともこの時期に集落と呼べる居住空間が04区に存在していたと判断したい。

この時期における周辺遺跡の調査成果に目を向けてみると、石堂野遺跡においては、8世紀中～後葉の竪穴住居跡が検出遺構の主体をなしていて、それぞれの住居跡の位置関係は弧状を呈している。高坂遺跡からやや下った時期において、石堂野遺跡の地点に古代の集落が展開していたことは間違いないところであろう。さらに石堂野B遺跡においては、平安時代中期の緑釉陶器、円面硯、仏具の組み合わせが考えられる灰釉陶器などが出土しており、掘立柱建物跡の可能性のある遺構とともに、一般的な集落とは性格を異にした空間も推定されている。これらの周辺調査事例が、高坂遺跡において検出された集落の移動にともなうものなのか、新たな集団の進入によるものなのかは、さらなる周辺資料の追加を待って判断されることとなるであろう。

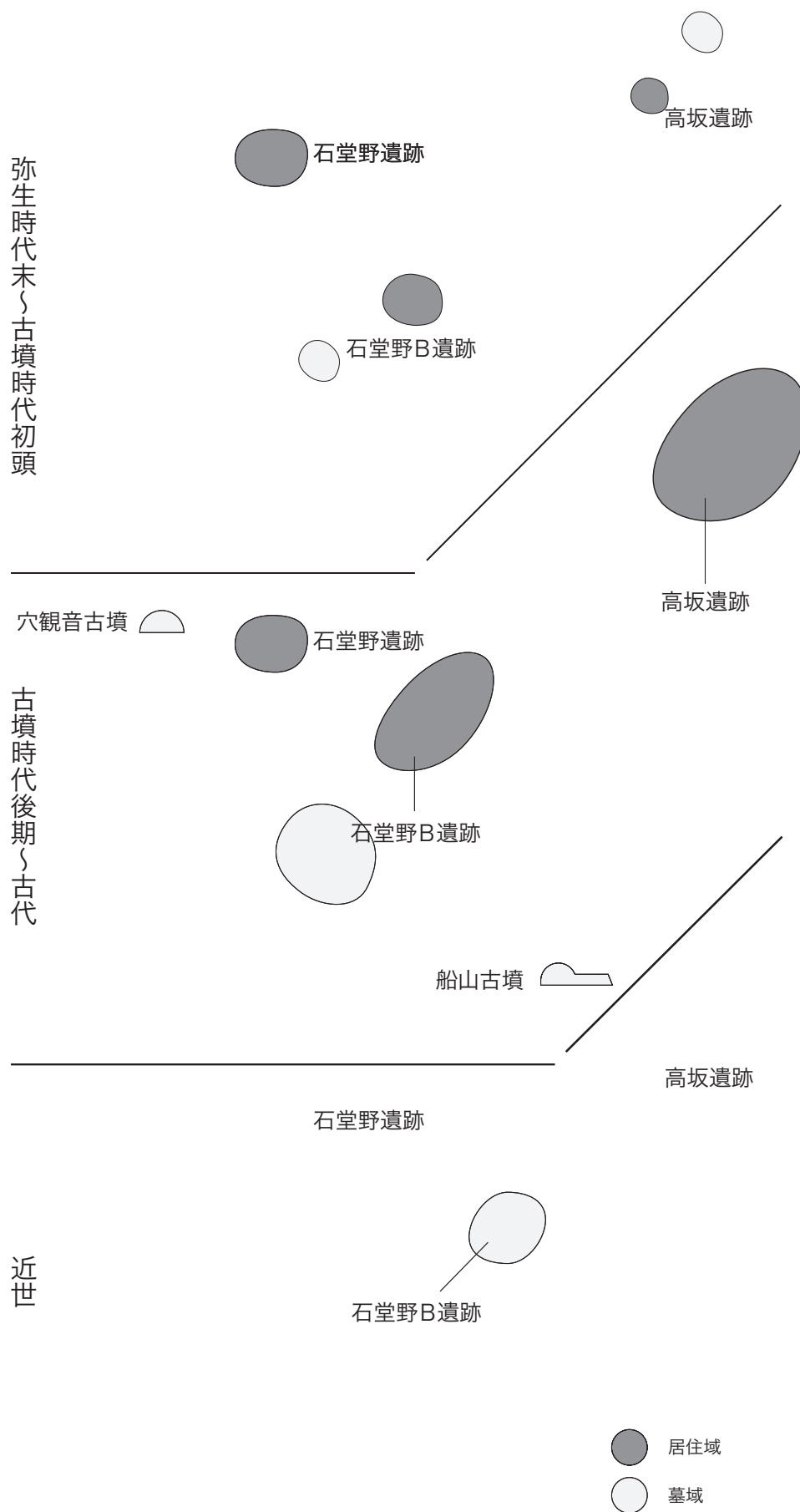
中世から近世の遺構、遺物は高坂遺跡の99区、04区においてはわずかに確認された程度で、濃密な痕跡は確認できなかった。04区のS D501からは、再掘削後に堆積したと思われる埋土の中から、戦国時代のものと思われる土器内耳鍋が出土している。さらに、検出作業中に出土した遺物の中には、この時期の天目茶碗も出土しているため、当時の状況を推測できるような遺構を期待したが、これを見出せなかった。

本遺跡の調査において確認できた遺構、遺物は、当地域における各時代の人々の足跡を考える時、有効な資料となるであろう。さらに、検出された各時期の資料は、東三河地域における今後の歴史解明において有効であり、さらなる資料の増加がのぞまれるところである。

参考文献

宮腰健司編 1987 『石堂野遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター

松田 訓編 2003 『石堂野B遺跡』（財）愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター



第40図 変遷概念図

写真図版

写真図版目次

図版 1

- (1) 高坂遺跡遠景（南西より）
- (2) 99区（南より）
- (3) 99区（東より）
- (4) 99区（南東より）
- (5) 99区（北西より）

図版 2

- (1) 99区作業風景（南西より）
- (2) 99区 S K39断面（南西より）
- (3) 99区 S K41断面（西より）
- (4) 99区 S K53断面（東より）
- (5) 99区 S X04周辺（南より）

図版 3

- (1) 99区 S B02（南西より）
- (2) 99区 S B02断面（南西より）
- (3) 99区 S B02遺物出土状態（南西より）
- (4) 99区 S B02断面（北西より）
- (5) 99区 S B02遺物出土状態（北西より）

図版 4

- (1) 99区 S B01断面（南西より）
- (2) 99区 S B03断面（南より）
- (3) 99区東側（北東より）
- (4) 99区西側（北東より）
- (5) 99区航空測量（南西より）

図版 5

- (1) 04区調査前風景（北東より）
- (2) 04区南壁（西より）
- (3) 04区東側（南西より）
- (4) 04区西側（北東より）
- (5) 04区作業風景（南西より）

図版 6

- (1) 04区 S B502（南より）
- (2) 04区 S B502カマド断面（南西より）
- (3) 04区 S B504（南より）
- (4) 04区 S B504断面（南西より）
- (5) 04区 S B507（南より）
- (6) 04区 S B507カマド断面（南西より）
- (7) 04区 S B508（南より）
- (8) 04区 S B508断面（南より）

図版 7

- (1) 04区 S B510（南より）
- (2) 04区 S B510（南西より）
- (3) 04区 S B511（南より）
- (4) 04区 S B511（北より）
- (5) 04区 S B602（東より）
- (6) 04区 S X523・524（西より）
- (7) 04区 S D501断面（南より）
- (8) 04区 S D501遺物出土状況（東より）

図版 8

- (1) 04区 S X503（南より）
- (2) 04区 S X503断面（南西より）
- (3) 04区 S X504（南より）
- (4) 04区 S X504断面（南西より）
- (5) 04区 S X520（南より）
- (6) 04区 S X520断面（南西より）
- (7) 04区 S Z501（南西より）
- (8) 04区 S D501（南より）

図版 9

- 遺物写真 (1)

図版10

- 遺物写真 (2)



(1) 高坂遺跡遠景（南西より）



(2) 99区（南より）



(3) 99区（東より）



(4) 99区（南東より）



(5) 99区（北西より）



(1) 99区作業風景（南西より）



(2) 99区 S K39断面（南西より）



(3) 99区 S K41断面（西より）



(4) 99区 S K53断面（東より）



(5) 99区 S X04周辺（南より）



(1) 99区 S B02 (南西より)



(2) 99区 S B02断面 (南西より)



(3) 99区 S B02遺物出土状態 (南西より)



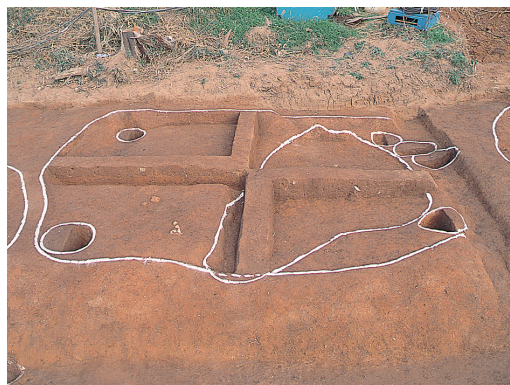
(4) 99区 S B02断面 (北西より)



(5) 99区 S B02遺物出土状態 (北西より)



(1) 99区 S B01断面 (南西より)



(2) 99区 S B03断面 (南より)



(3) 99区東側 (北東より)



(4) 99区西側 (北東より)



(5) 99区航空測量 (南西より)



(1) 04区調査前風景（北東より）



(2) 04区南壁（西より）



(3) 04区東側（南西より）



(4) 04区西側（北東より）



(5) 04区作業風景（南西より）



(1) 04区 S B 502 (南より)



(2) 04区 S B 502カマド断面 (南西より)



(3) 04区 S B 504 (南より)



(4) 04区 S B 504断面 (南西より)



(5) 04区 S B 507 (南より)



(6) 04区 S B 507カマド断面 (南西より)



(7) 04区 S B 508 (南より)



(8) 04区 S B 508断面 (南より)



(1) 04区 S B510 (南より)



(2) 04区 S B510 (南西より)



(3) 04区 S B511 (南より)



(4) 04区 S B511 (北より)



(5) 04区 S B602 (東より)



(6) 04区 S X523・524 (西より)



(7) 04区 S D501断面 (南より)



(8) 04区 S D501遺物出土状況 (東より)



(1) 04区 S X 503 (南より)



(2) 04区 S X 503断面 (南西より)



(3) 04区 S X 504 (南より)



(4) 04区 S X 504断面 (南西より)



(5) 04区 S X 520 (南より)



(6) 04区 S X 520断面 (南西より)



(7) 04区 S Z 501 (南西より)



(8) 04区 S D 501 (南より)



2



3



5



13



14



15



16



17



20



22



26



27



39



46



47

遺物写真 (1)



報告書抄録

ふりがな	こうさかいせき							
書名	高坂遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第143集							
編著者名	松田 訓、宮腰健司							
編集機関	財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター							
所在地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 8 0 2 - 2 4 TEL 0567-67-4161							
発行年月日	西暦 2 0 0 8年3月3 1日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° , ' , "	東経 ° , ' , "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こうさか いせき 高坂遺跡	あいちけん ほいぐん 愛知県宝飯郡 みとちょう ひろいし 御津町広石	23604	85017	34度 49分 47秒 34度 49分 46秒	137度 18分 54秒 137度 18分 58秒	1999/8/17 ～ 1999/12/24 2004/10/12 ～ 2005/2/11	3500㎡	県道大塚 国府線建 設に伴う 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
高坂遺跡	集落 ほか	弥生～近世	方形周溝墓 竪穴住居		弥生・土師器 灰釉陶器			

文書番号	発掘届出（10埋セ106 1998.4.1） 発掘許可（10教文11-6 1998.4.14） 発掘届出（11埋セ116 1999.5.31） 発掘許可（11教文61-20 1999.6.8） 発掘届出（16埋セ46 2004.8.31） 発掘許可（16教生1097 2004.9.15） 終了届（10埋セ141 1998.5.21） 発見届（10埋セ142 1998.5.21） 終了届（12埋セ5 2000.1.12） 発見届（12埋セ6 2000.1.12） 終了届（16埋セ102 2005.2.15） 発見届（16埋セ102 2005.2.15） 保管証（10埋セ142 1998.5.21） 認定（10教文61-6 1998.6.29） 保管証（12埋セ6 2000.1.12） 認定（11教文61-20 2000.2.23） 保管証（16埋セ102 2005.2.15） 認定（16教生2142 2005.3.29）
------	---

要約	本遺跡は、三河山地東部の、山裾に広がる台地上に展開する。調査では、弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴住居跡、方形周溝墓や、古代の竪穴住居跡を主体とした遺構が複数検出され、居住域だけでなく、墓域として利用された時期も考えられることから、当該期に近隣に所在した集落も想定される。本遺跡は、台地上に展開する遺跡群に含まれているものと思われ、周辺の集落遺跡を含めた実態を解明する上で、貴重な資料として位置づけることができよう。
----	---

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第143集

高 坂 遺 跡

2008年 3 月31日

編集・発行 財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 西濃印刷株式会社

高坂遺跡

■遺物一覽表

EXCEL形式

HTML形式